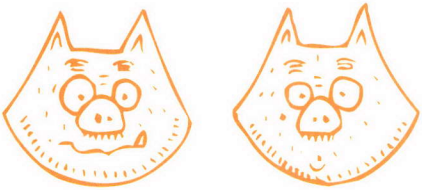
ポプラポケット文庫



ポプラ社

作・原ゆたか（はら　ゆたか）
1953年、熊本県に生まれる。1974年KFSコンテスト・講談社児童図書部門賞受賞。主な作品に、『ちいさなもり』「プカプカチョコレー島」シリーズ、「よわむしおばけ」シリーズ、「ほうれんそうマン」シリーズ、「かいけつゾロリ」シリーズ、「おばけのユータくん」シリーズ、「魔法のおみやげ」シリーズなどがある。

このお話の主人公かいけつゾロリは「ほうれんそうマン」シリーズの著者みづしま志穂氏の御諒解のもとにおなじキャラクターで新たに原ゆたか氏が創作したものです。

収録作品について
『かいけつゾロリのドラゴンたいじ』（ポプラ社 1987.11）
『かいけつゾロリのきょうふのやかた』（ポプラ社 1988.5）

2005年10月　第１刷　　2017年３月　第23刷

ポプラポケット文庫050-1

ゾロリ２in１　かいけつゾロリの**ドラゴンたいじ きょうふのやかた**

作・絵　**原ゆたか**
発行者　長谷川 均
発行所　株式会社ポプラ社
東京都新宿区大京町22-1・〒160-8565
振替　00140-3-149271
電話（編集）03-3357-2216　（営業）03-3357-2212
インターネットホームページ http://www.poplar.co.jp

印刷所　瞬報社写真印刷株式会社
製本所　大和製本株式会社
Designed by 濱田悦裕

©原ゆたか　2005年　Printed in Japan
ISBN978-4-591-08880-7　N.D.C.913　183p　18cm

落丁本・乱丁本は送料小社負担でお取り替えいたします。
小社製作部宛にご連絡下さい。
電話0120-666-553　受付時間は月～金曜日、9:00～17:00（祝祭日は除く）

読者の皆さまからのお便りをお待ちしております。
いただいたお便りは、編集部から著者へお渡しいたします。
本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権法上認められておりません。

チョイスの一つにしたかったのです。

かつてわたしもそうであったように、本を読むのがめんどくさいという本嫌いの子がついつい最後までページをめくってしまう、そんな本が目標でした。

「ドラゴンたいじ」が一九八七年十一月、「きょうふのやかた」が一九八八年五月、もう十八年も前のことで、その頃一年生だった子どもが今や二十四歳の成人です。そろそろお父さんやお母さんになり、うれしいことにサイン会に子どもを連れて来てくれることもあります。わたしもガタがくるわけだなあと痛感しています。

さて、この二つのお話は、さすがに十八年前の作品。ゾロリも、イシシ、ノシシも今の姿とは別人のよう。子ども達はランダムに読んでくれているようですが違和感はないのかなと感心してしまいます。ずっと現役の児童書でありたいので文庫化は最後まで反対でしたが、昔子どもの頃読んでくれた皆さんが、もう一度なつかしいと思って手に取ってくれるならとあえて加筆もせず、へたっぴーのまま、ここに刊行する運びとなりました。今、読み返すと、当時なりのせいいっぱいのサービスをしてあるつもりですが、最近の本では、もっとハードにかくし絵や秘密、おまけてんこ盛りになっています。久しぶりにこの本で「ゾロリ」を読んでくれたあなた、子どもにかえって、今度は児童書のコーナーで最近作のゾロリも手に取ってみてくださいね。

あとがき

昔、子どもだった皆さんへ

原ゆたか

わたしは、絵本や児童書のさし絵を描く絵描きとしてこの業界に入ってきました。しかし、なまいきにもある時期から、このお話はおもしろくないだの、納得いかないだのと他人の作品に文句たらたらのわたしに、当時の坂井編集長（現・ポプラ社社長）がおっしゃいました。

「だったら自分で書きなさい。」

そして売り言葉に買い言葉、わたしは「かいけつゾロリ」をひとりで書くはめになってしまったのです。その頃大ヒットしていた、S・スピルバーグ監督の「インディ・ジョーンズ」シリーズに感化され、始めから終わりまでハラハラドキドキ、サービスたっぷりのお話を書くぞと意気込んでみましたが、他人の作品に文句をつけることと、まったく何もないところからお話を産み出すということは、まさに雲泥の差。大変な作業だと思い知らされたのです。

『本を読む』ことは、どうしても勉強の延長線上にあり、子ども達には敬遠されがちな文化のように思え、わたしは児童書をマンガやアニメやTVやゲームと同じ土俵にのせて、楽しみの

ドラキュラ

こんしゅうの ことば

じゅうじかも ななめに すれば ただの ばつ

じゅうじかが なんだ

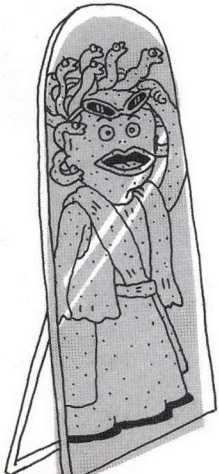
☆すききらいを なくそうと にんにくを たべる れんしゅうを しています。

・にんにく いり トマト ジュース

・じゅうじか がた にんにく ハンバーグ

・にんにく いり トマトシチュー

ゴーゴン



……

☆じぶんの 目を みても 石に ならない くんれんを していて 石に なって しまいました。

おまけページ

おおかみ男

☆まん月じゃ なくても
毛が はえる
どりょくを して
います。

毛はえ
ぐすり

102

101

ふろ
りん

ペンタ
デカ

しでん
かい

ミイラ男

☆いろいろな ものに
ほうたいを まいて
ほどけにくい ほうたいの
むすびかたを
けんきゅう しています。

妖怪たちはゾロリ先生に注意されたことをなおそうと、努力をしています。いつかもっと世にもおそろしい妖怪になって、きみたちをこわがらせにいくぞ!!

町をにげだすとき、ギョウザぬすんできましたぜ。ゾロリせんせ、これで、きげんなおしてくださいよ。
あんそうら？

おまえたちが
ピョンシーのおふだを
強力にはりつけるから、
とんでもないことになっ
ちまった。あんなこと
さえなけりゃ、いまごろ
あの町は、おれさまの
ものだったのに……。

まあ、まあゾロリせんせ。
そんなにおこらないで。

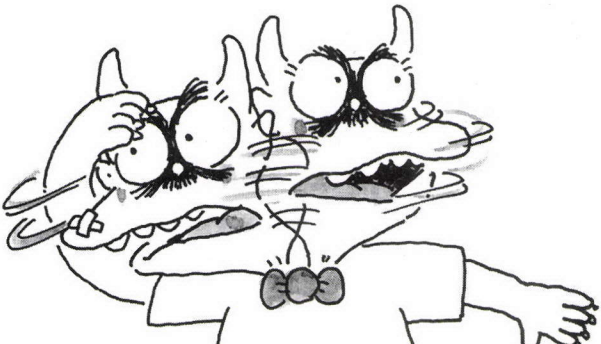
ゾロリのママから読者のみなさんへ

⊙いつも うちの ゾロリが
おせわに なって おります。
こんかいは、ゾロリちゃん
いいとこ みせられなかった
みたいですけど ゆるして
やってね。

つぎは、きっと
がんばると
おもいますわ。

☆ゾロリが ドラキュラに へんしんした
ときの きねん しゃしんです。

町はふたたび、平和をとりもどしました。
でも、町のみんなは、ちょっと妖怪がきらいになりました。だって町いちばんのおやしきを、めちゃくちゃにされたのですから。
「きらわれるのも、妖怪にとっては大きな進歩です。ゾロリ先生、ありがとうございー……。」
先生が、お礼をいおうとしたとき、ゾロリはもう風のようにきえていました。



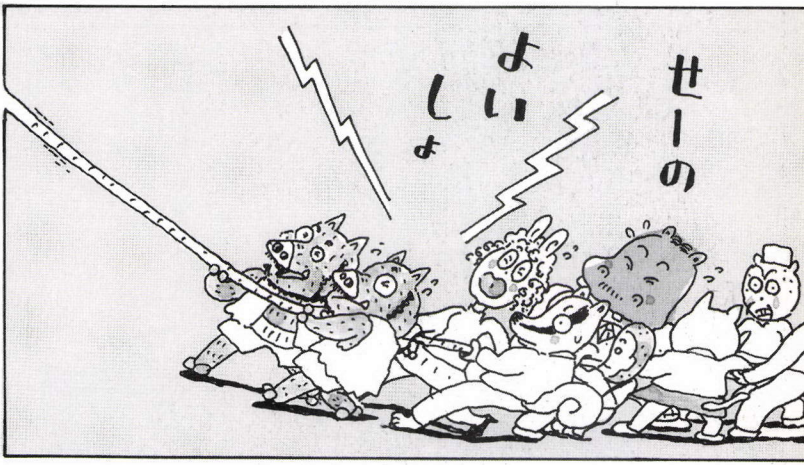
ごらんのとおりです。

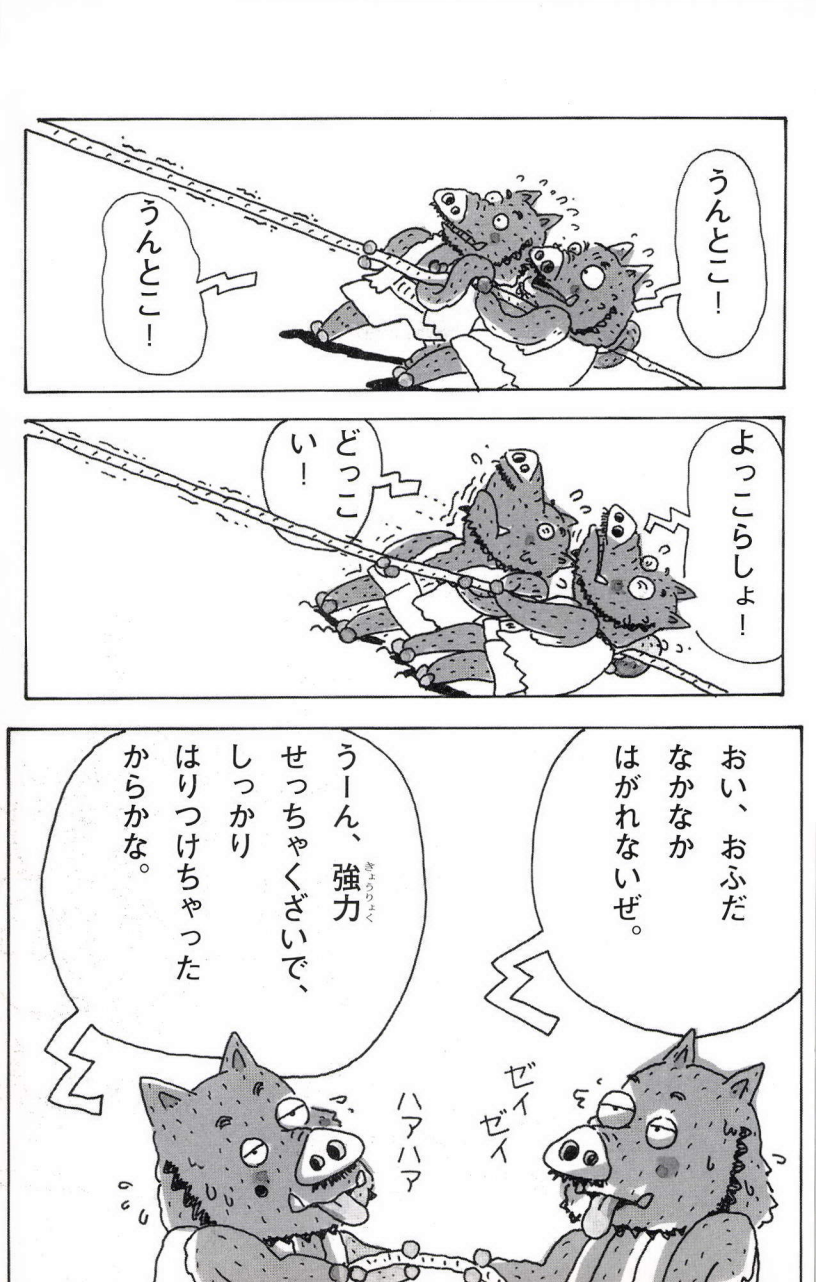
ウエーン。
ママー、おれさま、
妖怪(ようかい)じゃないから、
うまくいかなくても
しかたないよね――。
ぼくちゃん、いたずらの
王者(おうじゃ)として、また
がんばるから
見(み)すてないでね――。
ゾロリせんせ
ごめんね。
ゾロリせんせ
ごめんね。
おふだ

ピョンシーのおでこに、
しっかりとはりついたおふだは、
とうとうはがれずに――

ん？　いやな予感！
へんな音がしたぞ。
みしっ。

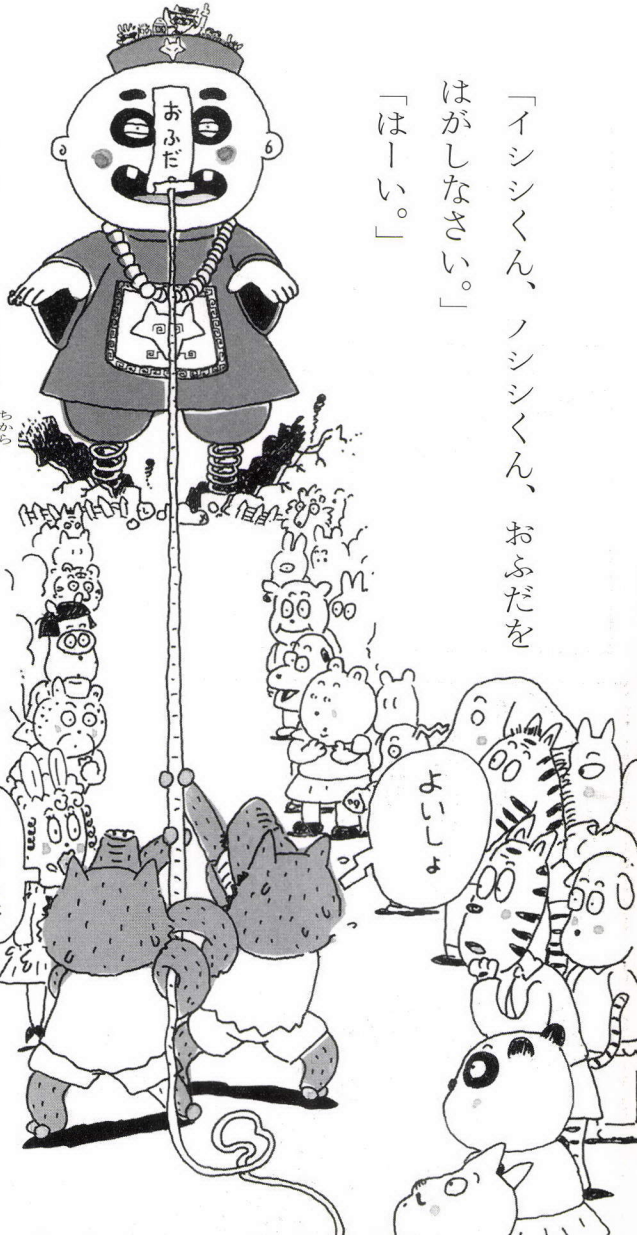
「すんませーん。
ちょっとロープひっぱるの、
てつだってくれませんか。」
イシシがたのむと、町のみんなは、ロープをひっぱってくれました。
これでピョンシーのおふだもはがれるでしょう。




うんとこ！
うんとこ！
よっこらしょ！
どっこい！
おい、おふだなかなかはがれないぜ。
うーん、強力せっちゃくざいで、しっかりはりつけちゃったからかな。
ゼイゼイ
ハアハア

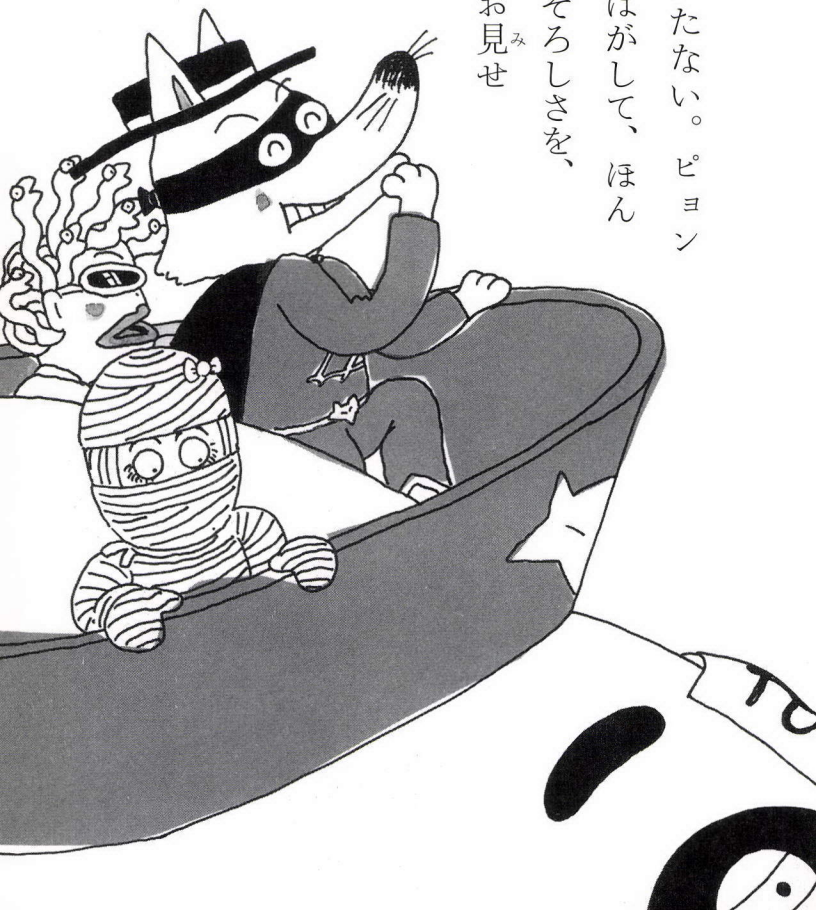
「イシシくん、ノシシくん、おふだを
はがしなさい。」
「はーい。」

イシシとノシシは、力を
あわせて、おふだのロープをひっぱりました。



「それではしかたない。ピョンシーのおふだをはがして、ほんとうの妖怪のおそろしさを、いやというほどお見せしなくてはいけませんね。」

ゾロリは、にたりとわらいました。

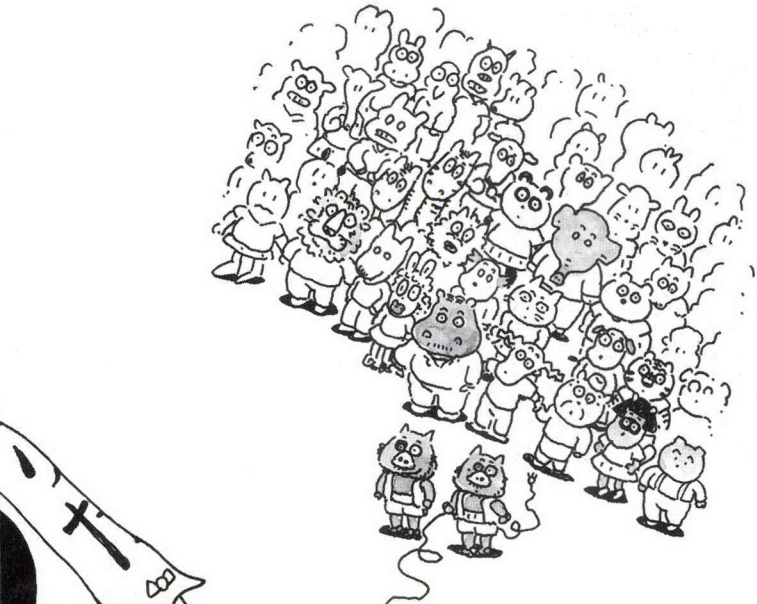


「さあ、みなさん、おわかりですね。けがをしないうちに、にもつをまとめてこの町をでていきましょう。きょうからここは、ゾロリの町です。」

「な、なんだって、われわれのすみなれた町をかんたんにすてられるものか。」

「そうだ。そうだ。」

町じゅう、大さわぎ。



ああ、おそろしい！
中国妖怪 ピョン

★ちゅうごく 3000ねんの れきしを
ほこる「カップラーメンくびかざり」
おなかが すいたら みんなで
たべるのだ

•カップメンを たべるときの ための
おゆが でる

•のどが かわいたら
ウーロンちゃが でる

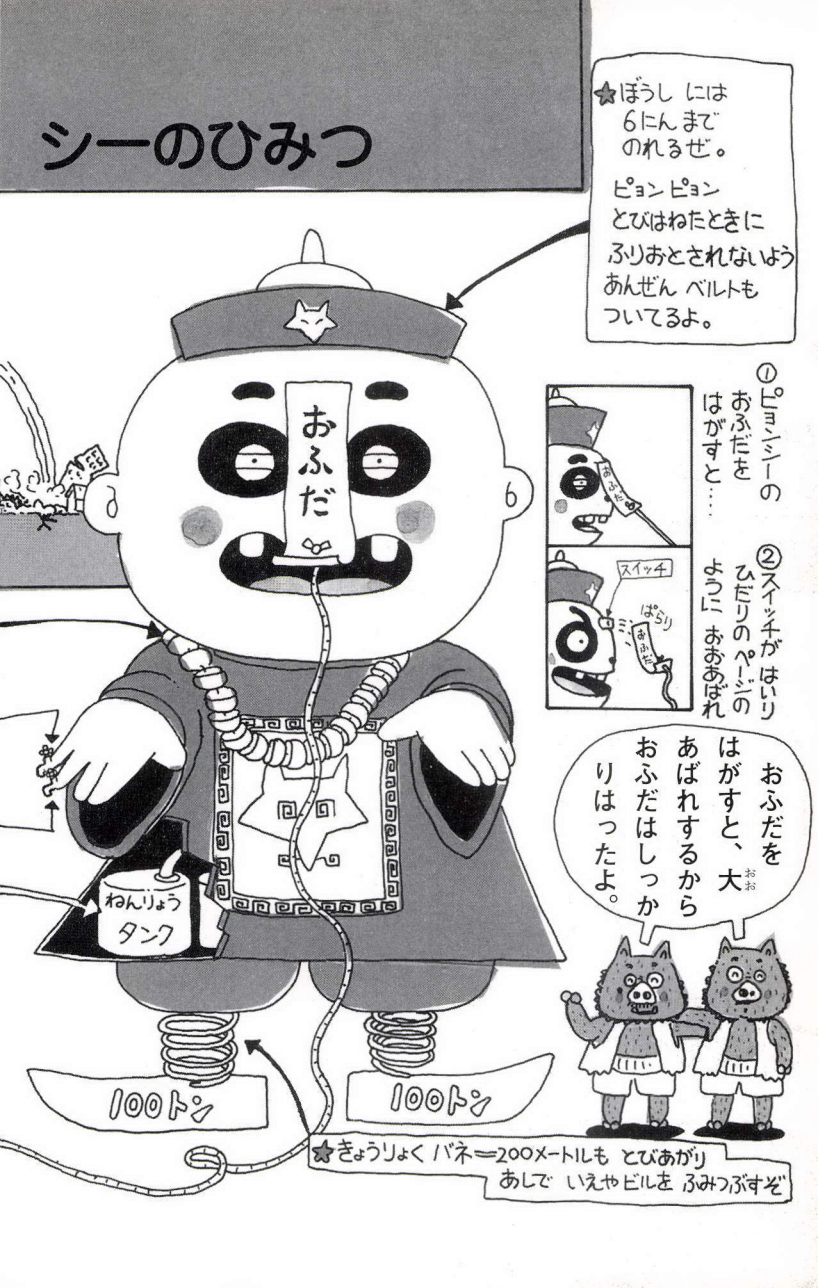
★ねんりょう タンク
ピョンシーの ねんりょうは
ガソリンなんかじゃない
ちゅうごく 3000ねんの れきしを
ほこる ウーロンちゃ なのだ!!

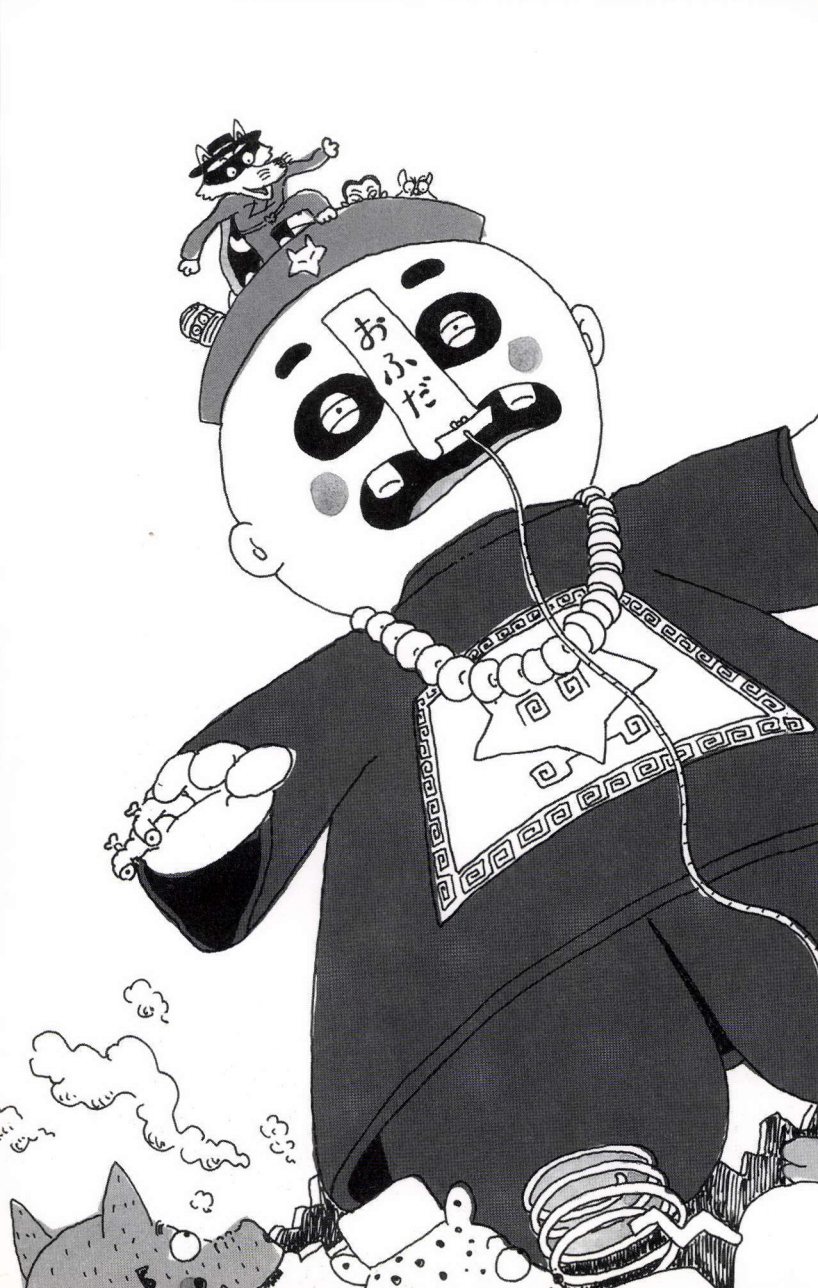
★このロープを ひっぱれば
おふだが パラリと はがれて
どえらい ことが
おこっちゃうのだ

こんなにおそろしい
ものをつくりだして
しまった、わたしの
才能がこわい。

さすが、
ゾロリ先生！

シーのひみつ

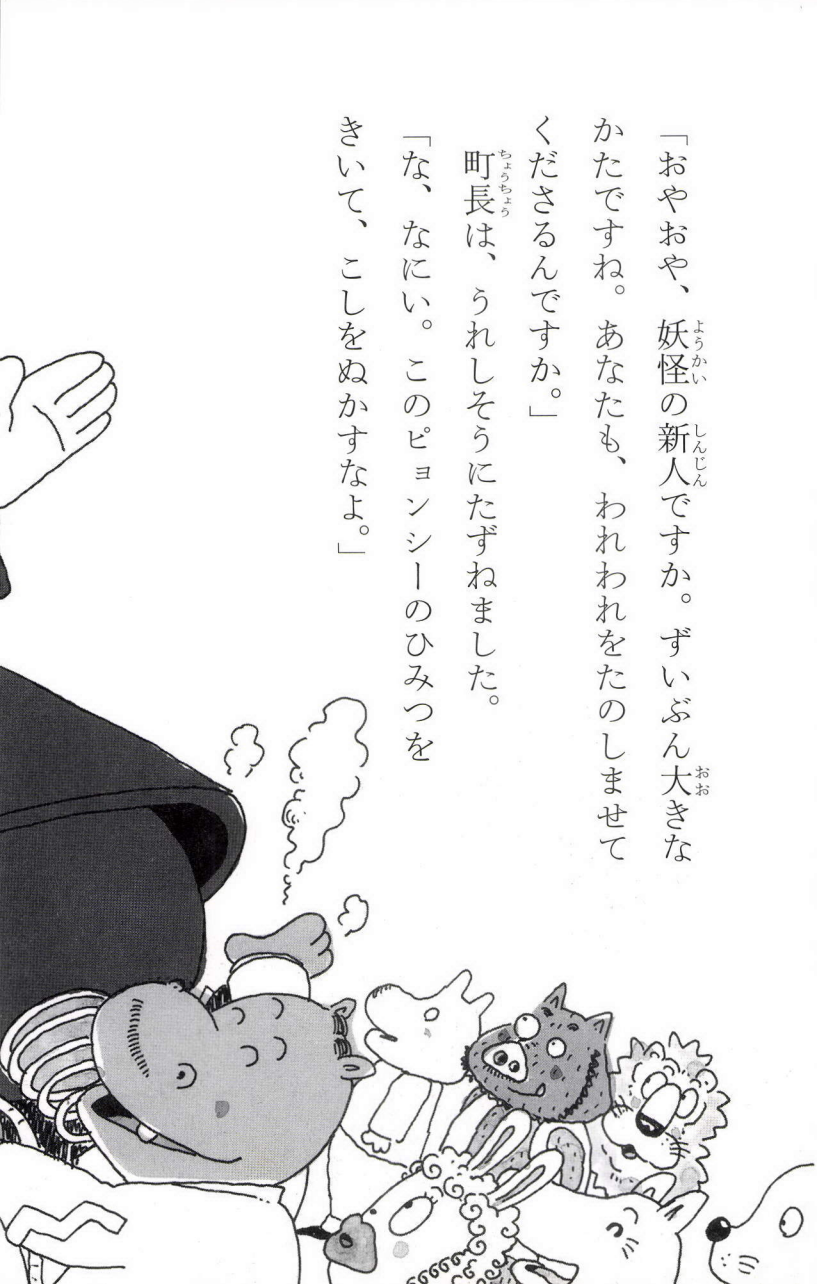

★ぼうし には
6にんまで
のれるぜ。
ピョン ピョン
とびはねたときに
ふりおとされないよう
あんぜん ベルトも
ついてるよ。
おふだ
①ピョンシーの
おふだを
はがすと…
②スイッチが はいり
ひだりのページの
ようにおおあばれ
スイッチ
ばらり
おふだ
おふだを
はがすと、大
あばれするから
おふだはしっか
りはったよ。
ねんりょう
タンク
100トン
100トン
★きょうりょく バネ=200メートルも とびあがり
あしで いえやビルを ふみつぶすぞ


おふだ

「おやおや、妖怪の新人ですか。ずいぶん大きなかたですね。あなたも、われわれをたのしませてくださるんですか。」

町長は、うれしそうにたずねました。

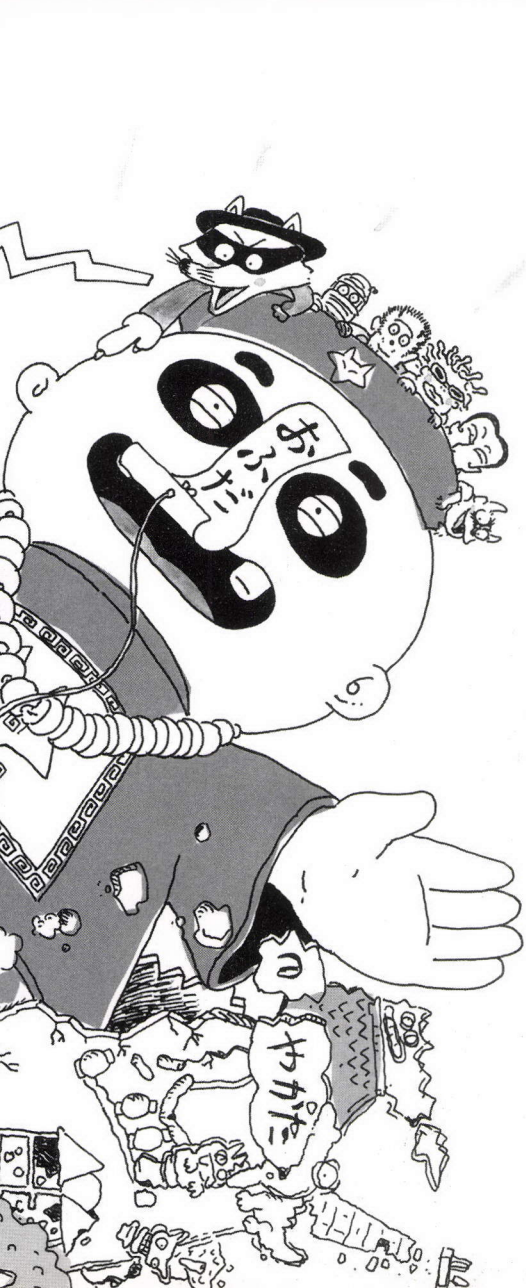
「な、なにい。このピョンシーのひみつをきいて、こしをぬかすなよ。」



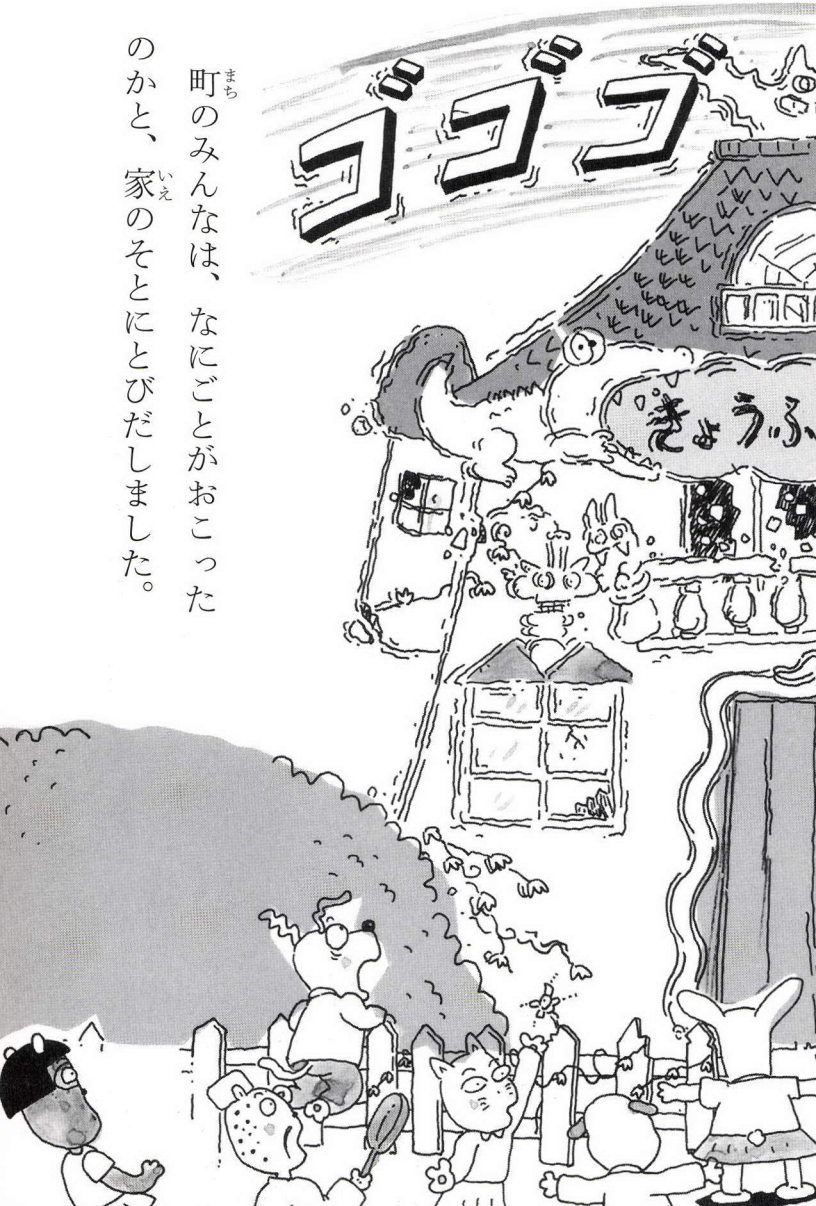
ニヒニヒニヒ。町のみなさま、しょうかいするぜ。おれさまが真心をこめてつくりあげた中国妖怪ピョンシーだあ！

ドドドドド――ン!!

きょうふのやかたは、みんなの見ているまえで、まっぷたつにわれて、なかから、巨大な妖怪があらわれました。

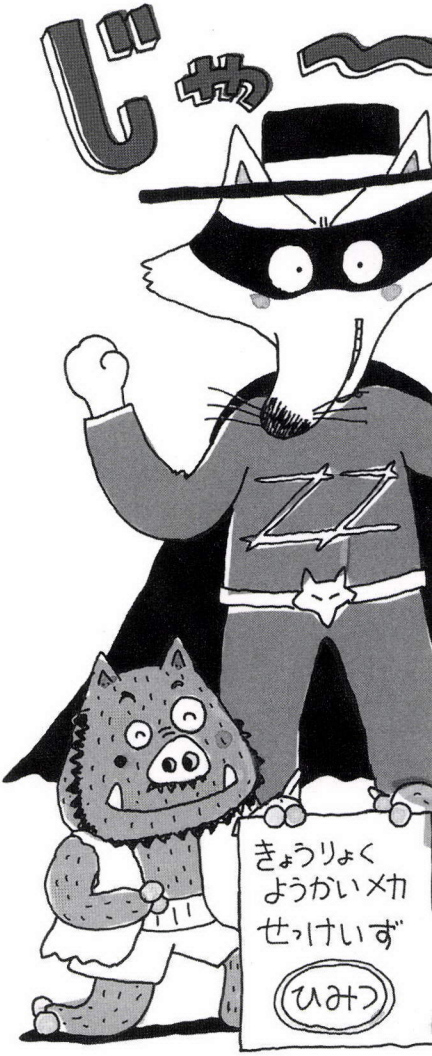


町のみんなは、なにごとがおこったのかと、家のそとにとびだしました。



そして四日目の夜、きょうふのやかたは、
地ひびきをたてて、ゆれはじめたのです。

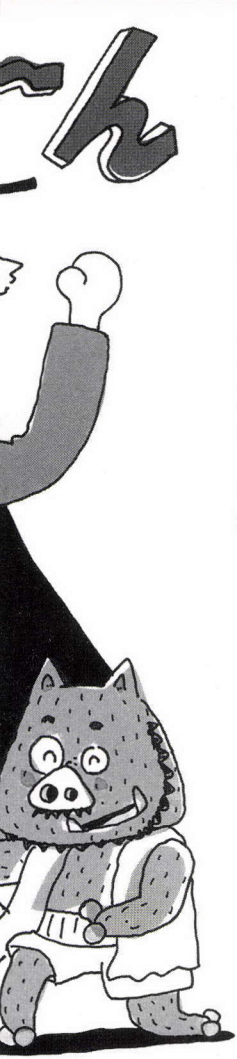
それから三日間というもの、きょうふのやかたからは、のこぎりや、かなづちの音が、なりひびきました。



その晩、ゾロリはまっ赤になっておちこんでいました。

しかしつぎの朝、いたずらの天才ゾロリは、みごとによみがえっていたのです。

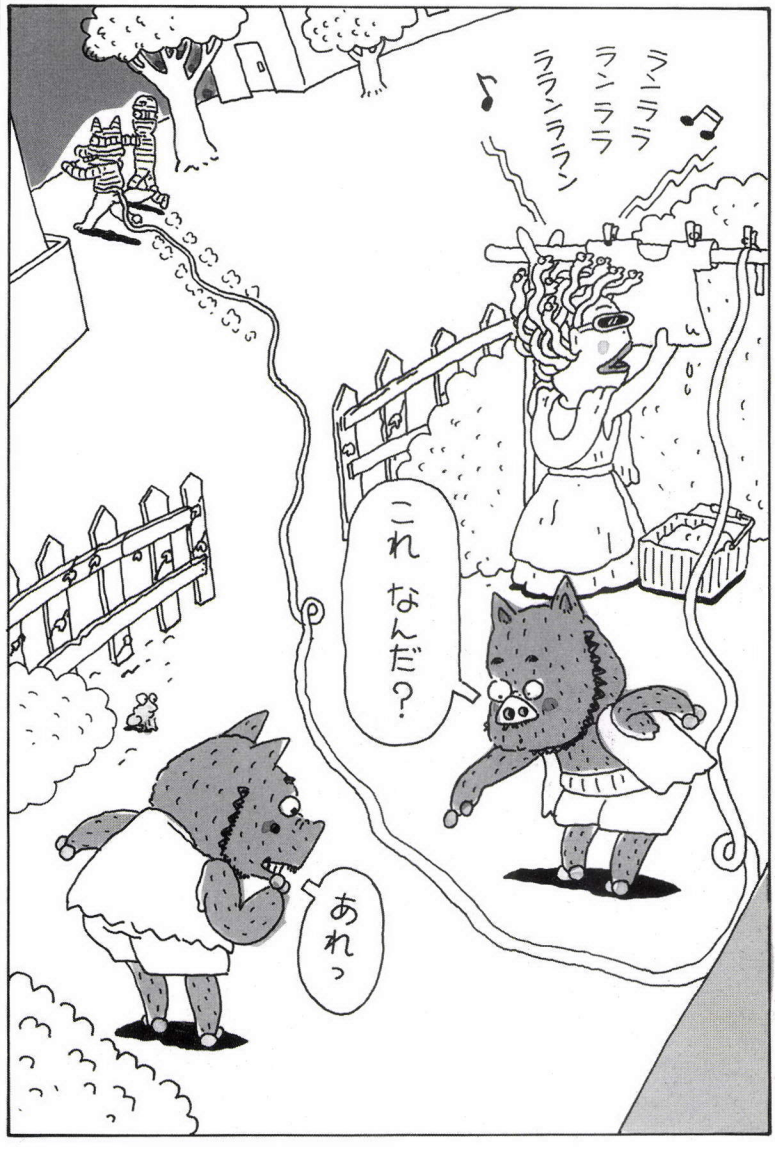
「妖怪しょくん。もう、きみたちの力をかりるのはやめた。おれさまがねずに考えた、強力妖怪メカで、この町をひとっこひとり住めない町にしてみせるぜ。たのしみにしていたまえ。」



でも、おそろしくて
にげたんじゃない
みたい……。
あらっ、
ぼ、ぼくちゃん、
いつのまに、はだかんぼに
なってたの。ママー、はずかし
いよ――。
ほれ！

みんな、おどろいてにげていきました。
げひんね〜
ニヒニヒ、おれさまのおそろしさ、思い知ったか。
はのー、ほのー、ホロリ先生。

ゾロリは、計画どおり草むらから、いきおいよくとびだしました。
キャ〜〜
あれ〜〜
ま〜〜〜
ザザザザザザ
はら、ホロリ先生、ひょっと。


ラーララ
ランララ
ラランララン
これ なんだ？
あれっ

ひゃ、ひっへふるへ。
あら。せんたくものが落ちてるわ。

イシシ、ノシシのほうたいまきが、へたくそで、いつもより変身に時間がかかりましたが、みごと、ミイラ男は、ゾロリにのりうつりました。

「どうふぁね。ほのはっほうへ、ふはむらはらほびはへは、ひんなおひっこひびるぜ。おへはまのひょうふのへんぎ、よーふへんひゅうふるんだぜ。」

「はひ。ひっくりはんこうにはへていはだきまふ。」

ふたりとも、ほうたいで、うまくしゃべれません。

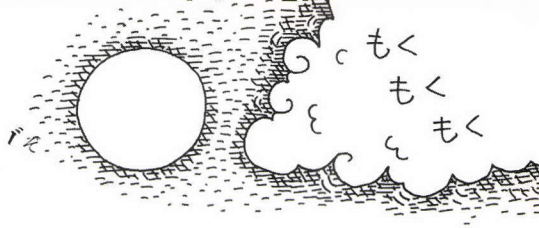
わたし、ひまだから、おせんたくでもしましょ。
おいおい、しっかりほうたい、まいてくれよ。
ミイラおとこのほん
じょうほうすいとりき
ビビビビビ
あれっ、こんがらがっちゃった。

「きのうの夜は、大はじをかいたぞ。プリプリ。ちゃんと変身できるのが、雲ひとつない満月の夜だけだなんて、おおかみ男はふべんな妖怪だぜ。のこるはミイラ男くん、きみだけだ。おれさま、がんばるぜ。」

いつのまにか、町のみんながおおぜいあつまってきて、ゾロリの変身ショーをたのしみました。

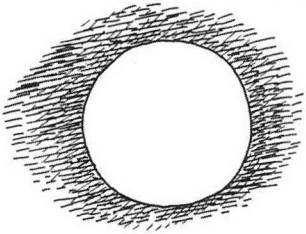
そのとき、月に雲がかかりはじめ、それにつれて、ゾロリも顔がかわりはじめたのです。
こりゃ、おもしろいや。お母さんもよんできなさい。

まてまて、まてーい。
おれさまはおそろしい
おおかみ男だあ～。
おまえたちを、
ガブリガブリさせて
もらうぜ



「あ、あらっ、ち、ちょっと、ま、まってくださいよ。ゾロリ先生、空のようすがおかしいですよ。」

おおかみ男が注意しましたが、ゾロリはそんなこと、きいちゃいません。きばをガチガチいわせて、とびだしていきました。



うーむ、このするどいきばで、ガブリガブリとだれかにかみつきたくなってきたぜ。おやっ。あっちから、運のわるいやつらがやってくるぞ。おれさまのえじきにしてやろう。ニヒニヒ。」

きょうふのやかたから、一歩そとにでて、青白い月の光をあびると、ゾロリはたちまちおおかみ男に変身しました。

「なるほど、なるほど、ガオーッ！

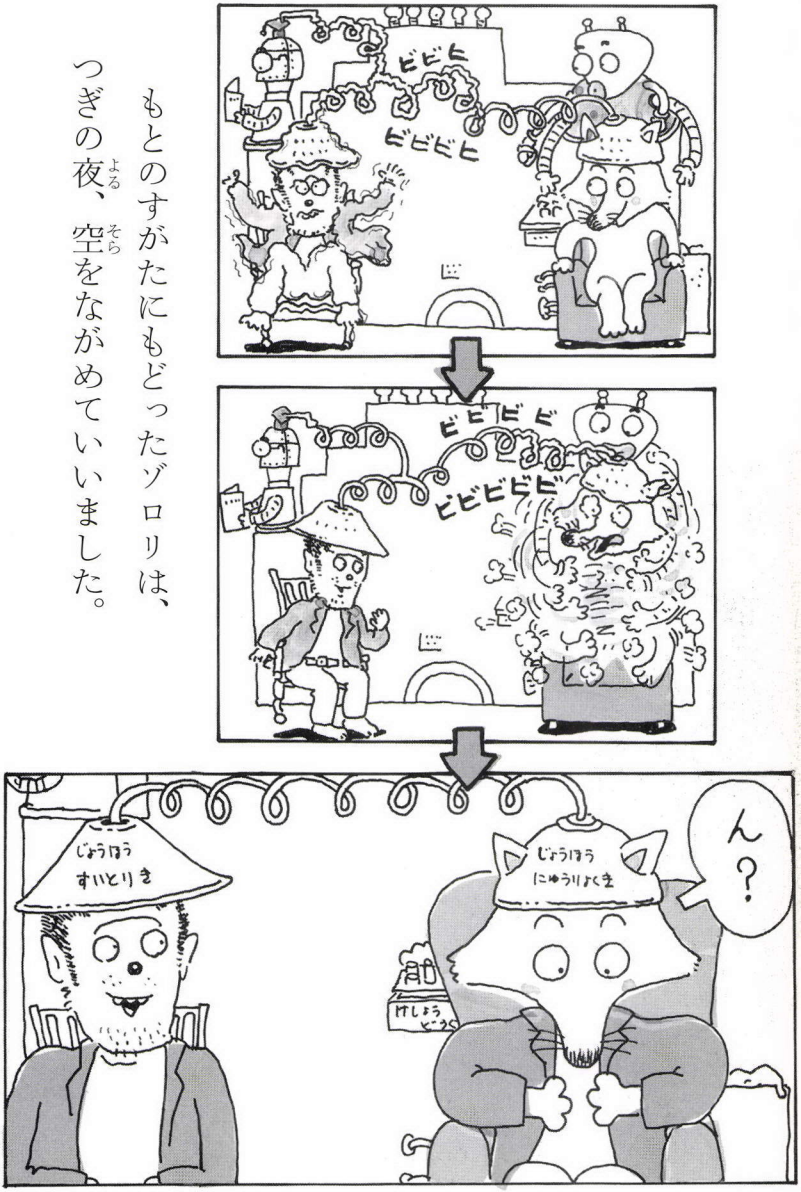
「ニヒニヒ。満月の夜には、おおかみ男に変身するしかないだろうな。」

おや、ゾロリにおおかみ男はのりうつったのでしょうか。

「おい、おれさま、いつものキツネ男のままだぞ。いつになったら、おおかみ男に変身できるのだ？」

「ゾロリ先生、われわれは、月の光にあたらないと、おおかみ男には変身できないのです。ちょっと、そとにでてみてください。」

もとのすがたにもどったゾロリは、
つぎの夜、空をながめていいました。



ゾロリ先生、
きょうふのやかたに
かえったら、もとの
おすがたになおして
さしあげますからね。

まにあいません。
ゾロリは、ガチンゴチンの石になってしまいました。
……
どうなっちゃったの？

「ゴーゴンさん、ごめんなさいね。」

「えっ、あたしの頭、どうなっちゃったの。」

ゾロリはしっかり見ようと、サングラスをはずして、鏡をのぞきこみました。

「ゾロリ先生、鏡を見ちゃだめよ!!」

ゴーゴンはさけびましたが……

ゾロリのかみの毛は、ほんもののヘビですから、たまりません。
ヘビはあつくて、のびてしまいました。

いつのまにかゾロリはいすにすわらされて、パーマの機械をかぶせられていたのです。
スポッ
あ、あら、わたし、パーマなんか、あの……。

美容院の女主人がとんできて、

「あーら、ゴーゴンさん、よくいらっしゃいました。きょうもいちだんとおきれいよ。でも頭のセットがいまいちね。ちょっと、なおしましょう。きっと世界一の美女になりますことよ、ほほほほほ……。」

ゾロリは、店にとびこむと、こういいました。
みなさーん、こちらをむいて、わたしの目をごらんになってー!!
サングラスをとろうとしたときです。

「それでは、この店のものを、みーんなガチンゴチンと石にしてくるわね。」

「ゾロリ先生、たのしみだわ。」

ゾロリがえらんだお店は、美容院です。

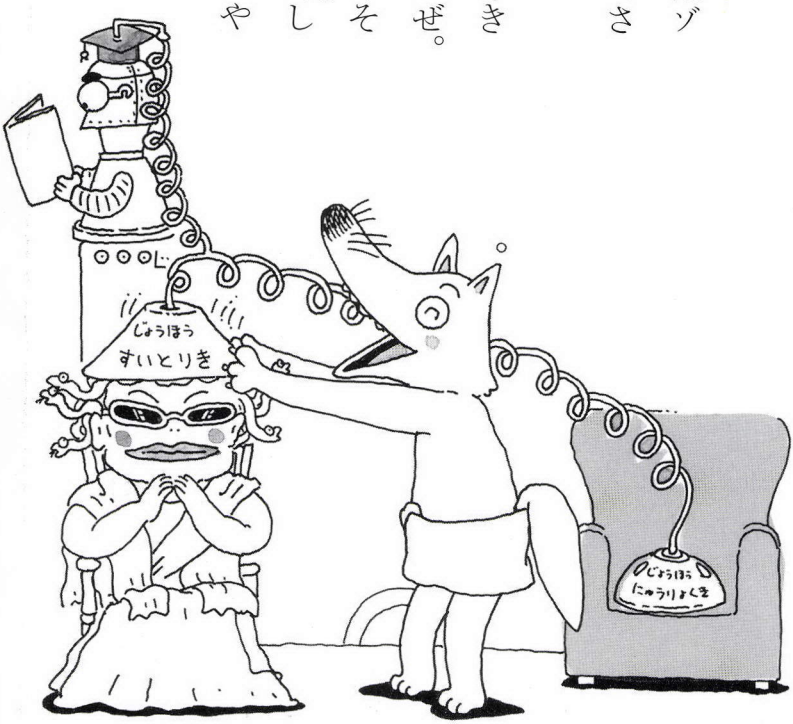
あいです。
「じっくり、わたしのこわさを見ておくんだわよ。わかった。」
「はい、まばたきせずに見せていただきますわ。」
早くサングラスをはずして、ガチンゴチンと、みんなを石にしたいわ。
さあ、でかけましょ。

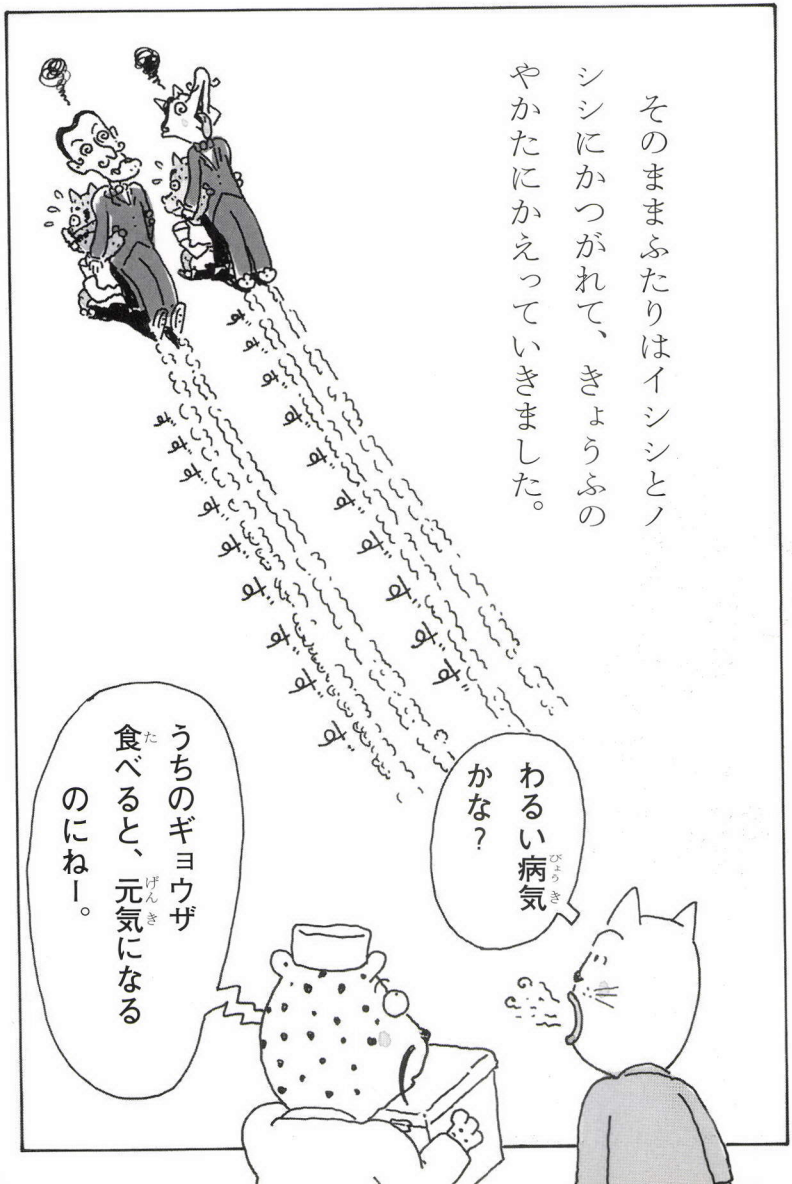
ゾロリにゴーゴンが、みごとのりうつりました。

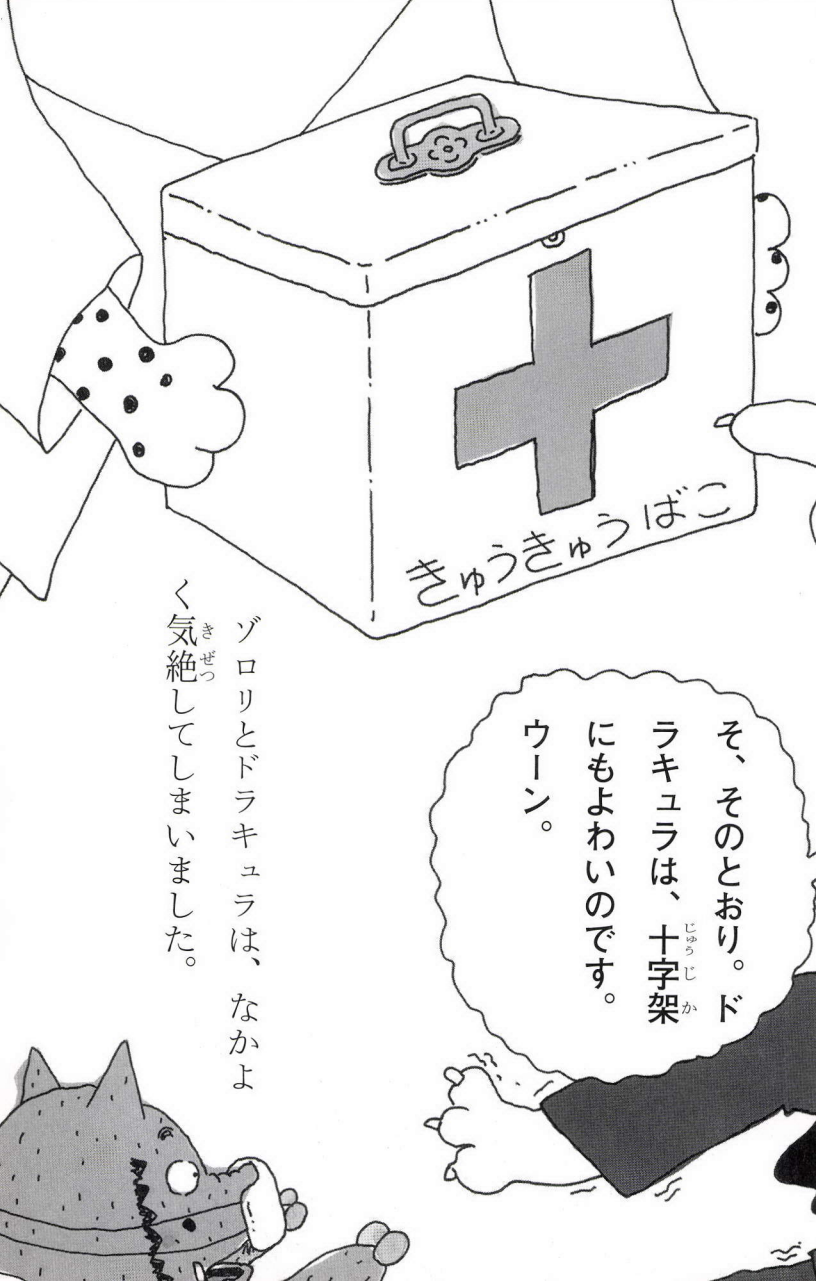
庭でつかまえたヘビのかつらが、おに

つぎの夜、元気になったゾロリは、妖怪たちのまえでさけびました。

「ドラキュラのようにすききらいの多い妖怪は、だめだぜ。みんな、すききらいはなくそう。今夜はゴーゴンに変身して、町のみんなを石にしてやるぞ。」




そのままふたりはイシシとノシシにかつがれて、きょうふのやかたにかえっていきました。
わるい病気かな？
うちのギョウザ食べると、元気になるのにねー。



ゾロリとドラキュラは、なかよく気絶してしまいました。

と、救急箱を、ゾロリの目のまえにさしだしました。

「な、なぜ、それをさきにいわんのだ。くっ、くるしーい。」

くるしんでいるゾロリを見た、店の主人は、

「ドラキュラさん、だいじょうぶですか。この箱の薬をおつかいください。」

「ど、どうしたのだ。ギョウザのにおいをかいだら、きゅうにくるしくなったぞ。」

ゾロリはふらふらとたおれこみました。

「だから、このお店はやめようっていったんです。ドラキュラは、むかしから、にんにくが、大の苦手なんですよ。」

おや、だれかと思ったら、ドラキュラさん。お食事ですか。ここのギョウザはおいしいですよ。ハハハハハ……。
らっしゃ〜い
はあ〜
むむっ、くっ、くるし〜。

「ニヒニヒ。食事にむちゅうで、おれさまに気がつかないぞ。いまのうちに首すじにかみついて、血をチュッチュしてやろう。」

ゾロリがかみつこうとしたときです……。

「なにをいってるんだ。そんな弱気だから、いつまでたっても一人前のドラキュラになれないんだ。まあ、おれさまのおてなみを、じっくり見ていなさい。」

ゾロリは、はりきって店にはいっていきました。

「よし。まずてはじめに、あの店の客の血を、チュッチュさせていただこうかい。」

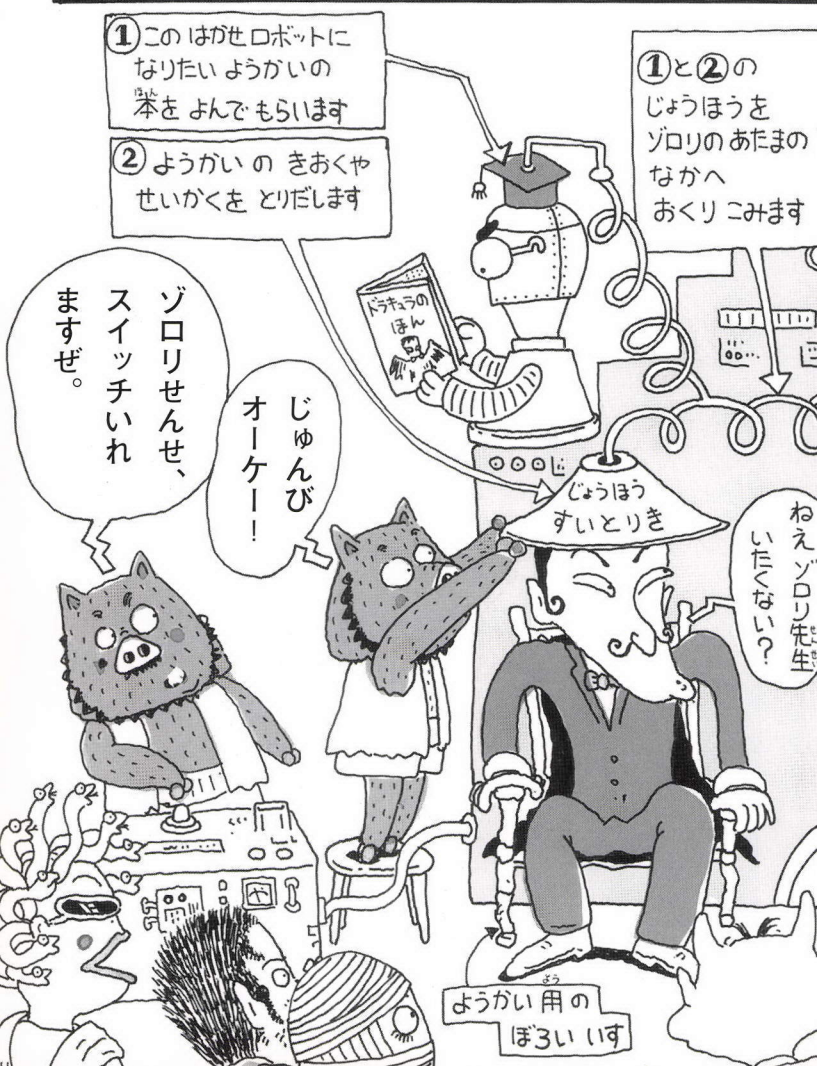
「えっ、ゾロリ先生、あのお店だけはおやめになったほうがよいかと、思いますよ。」

「よーく、おれさまのおそろしさを見ておくんだぞ。」
「は、はい。しっかり研究させてもらいます。」
うーむ、血がチュッチュとすいたくなってきたぜ。さあ、出発だー。
きもちわるいおんがくたんとうのイシシ
くさったさかな
なまぐさいにおいたんとうのノシシ
パタパタ

ゾロリにドラキュラが、みごとのりうつりました。ドラキュラがふるえるほどのドラキュラです。

あっというまに できた

ゾロリの妖怪変身



マシーン

そして夕方までに、ゾロリはこんなものをつくりあげました。

妖怪たちは
くたびれて、ぐっすりこんと、ねむっています。
しかしゾロリは、まだまだはりきって、なにやらつくっています。

朝になると、町のおやしきは、〝きょうふのやかた〟に生まれかわっていました。

よんでくりゃ
ぶきみで きたない
きょうふのやかた
ゴキブリャナメクジを
よぶ ふえを ふく 先生
オンで
かべをこわす
ノシシ
あかい えのぐで
ちが とびちった
ように みせる
イシシ
でんきゅうを
ろうそくに
かえる
おおかみ男
くものすを
ぬう ゴーゴン
ゾロゾロゾロ
ゾロゾロゾロ
ガンガン

そう決心したゾロリはまず、このおやしきを〝きょうふのやかた〟につくりかえることにしました。

おれたち　こわい
妖怪にゃ
きれいなおうちは
にあわない
よごしてこわして
くものす　はって
ゴキブリ　ナメクジ

☆へやにかざる
こわい「え」を
かく　ミイラ男

☆えんぎの
わるいものを
あつめる
ゾロリ

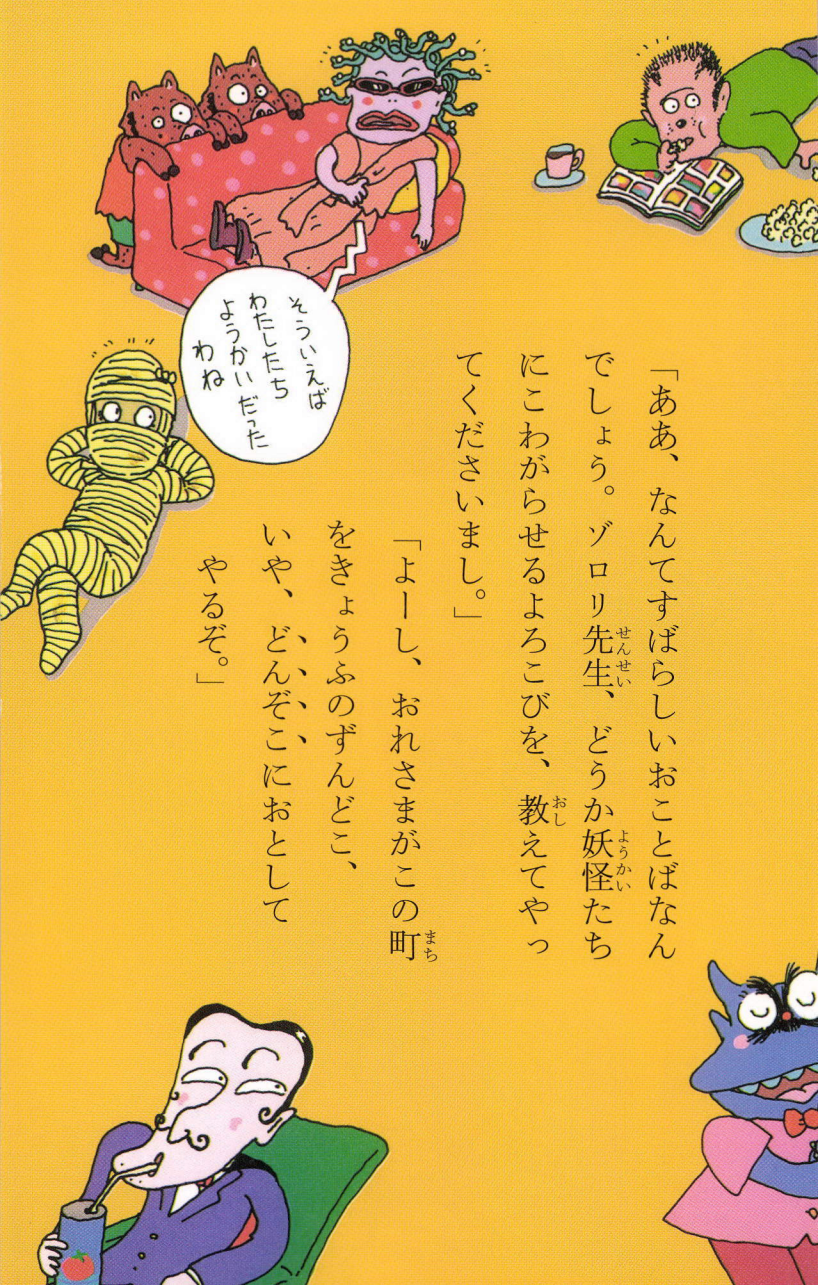
ごはんにたてた
おはし

わらにんぎょう

はなおの
きれたげた

おれた　おはし

☆ドラキュラは
かんおけづくり



「ああ、なんてすばらしいおことばなんでしょう。ゾロリ先生、どうか妖怪たちにこわがらせるよろこびを、教えてやってくださいまし。」

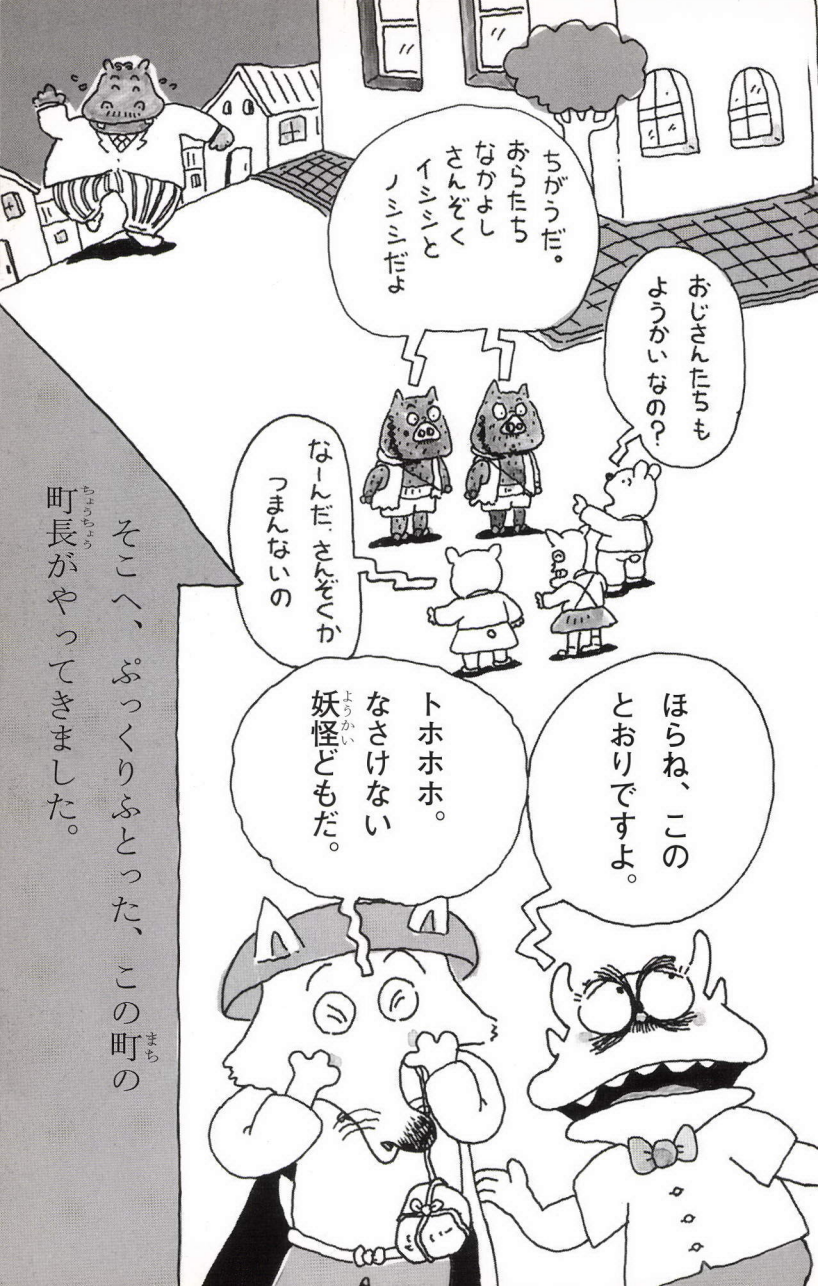
「よーし、おれさまがこの町をきょうふのずんどこ、いや、どんぞこにおとしてやるぞ。」

おやしきでのんびりしている妖怪たちを見て、ゾロリはもうがまんができません。

「ば、ばかもーん!!　きみたちは世界をこわがらせるために生まれてきたのだぞ。それをわすれて、なにが妖怪だ。きみたちのパパやママは、地獄で泣いているぞ。このおれさまがその根性をたたきなおしてやる!!」

町長は、この町いちばんのお客さま用のおやしきをかしてくれました。

たのしい妖怪のみなさん。
わが町をたずねてくださって、こどもたちも大よろこびです。
長旅でおつかれでしょう。
きょうはゆっくりおやすみになって、あしたから町のみんなをたのしませてくださいね。



そこへ、ぷっくりふとった、この町の
町長がやってきました。

やっと、ぼくらの町にも、妖怪があそびにきてくれたね。バンザーイ！

トマト・ジュース あげるから マント かしてよ

……

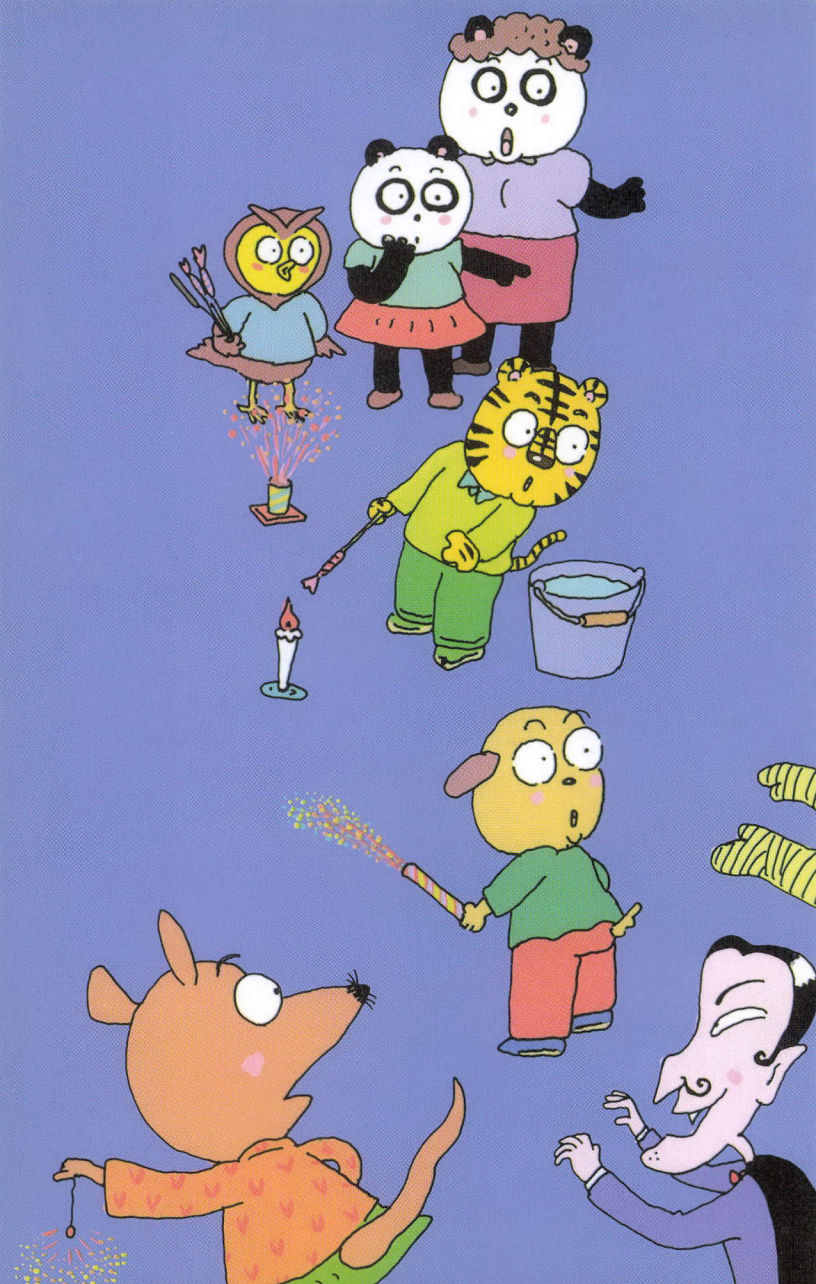
ほび ほび ひゃめへ ふへよ

ほうだいしてるから しゃべり にくい

ぼうや すまんねえ きょうは まん月 じゃないから へんしんできないのだよ ガオ

ガオ だって ハハハハハ

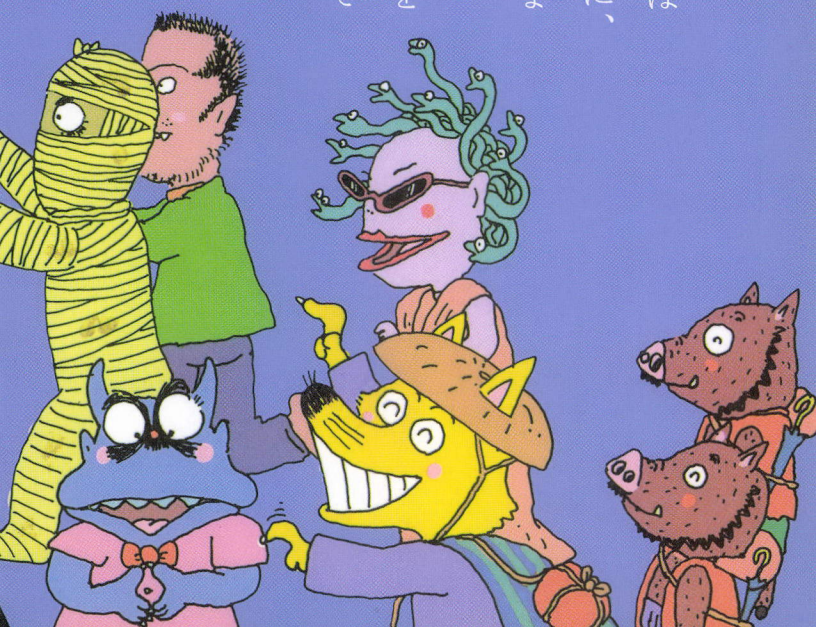
ねえ ほんとに おおかみ男なの はやく へんしんしてよ



ゾロリたちと、妖怪軍団が町にはいると、こどもたちはいっせいに、ふりかえりました。みんな、目をまんまるにしています。

「ニヒニヒ、妖怪しょくん、自信をもちたまえ。みんな、びっくりしてこわがっているぜ。」

「いやいや、ゾロリ先生、それならうれしいのですが……。」



いっしょにいって、こわがらせるおてつだいをしていただけませんか。」

「ニヒニヒ。それもおもしろそうだな。おなかもへってきたことだし、今夜は、そこでやすむことにするか。」

「お、おれさま、さっきちょっとだけ、こ、こわかったぜ。」

「お、おらたちも、こ、こわかっただよ。」

「ああ、そのおやさしいおことばに、われわれ、元気づけられます。」

「ゾロリ先生、このさきに小さな町がございます。」

ウェーン
オトオト
ヒューン

「き、きみたち、こ、こんなところで、なにをしてるんだね。」

ゾロリは、まだドキドキしているむねをおさえながら、たずねました。

「われわれは、妖怪軍団をつくり、世界をふるえあがらせようと、努力しているのですがね、いまの世の中、だれも妖怪をこわがってくれなくなったのであります。グ、グスン。」

先生が、なみだぐむと、妖怪軍団も、ゾロリのまわりにかけより、泣きだしました。

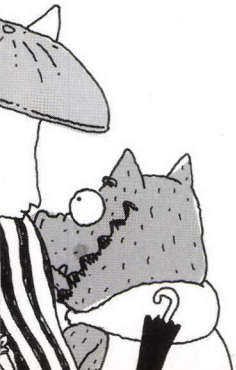
ゴーゴン
あたまが へびで
ゴーゴンの 目を みたものは
「ち」が こおり
石に なって
しまいます。
(なかまが
石にならない
ように いまは
サングラスを
しています。)
おおかみ男
まん月の よるに
おおかみに へんしんして
ガブリ・ガブリと
かみつきます。
(きょうは
まん月じゃないので
へんしん して
いません)
こんばんはー。ゾロリ先生。おあいできてうれしいです。
ミイラ男
エジプト だいひょう
おはかの ばんにん
ちからが つよくて
手で くびを
しめに
きます。
ドラキュラ
イギリス だいひょう
「ち」を チュッチュと
すって
いきて います。

「おや、ま、やっぱりあの歌声はゾロリさんでしたか、ほれ、むかし、おせわになった妖怪学校の……。」

「や、やあ、先生じゃないか。」

ゾロリは、むかし、妖怪学校でかつやくしたことがありました。

「妖怪しょくん!!　このかたが、かのゆうめいないたずらの天才、かいけつゾロリ先生ですぞ。」



ジリッジリッ、妖怪たちはどんどん近づいてきます。
そして、ゾロリにいいました。

ゾロリたちが気づいたときには、もうおそく、世にもおそろしい妖怪に、とりかこまれていました。

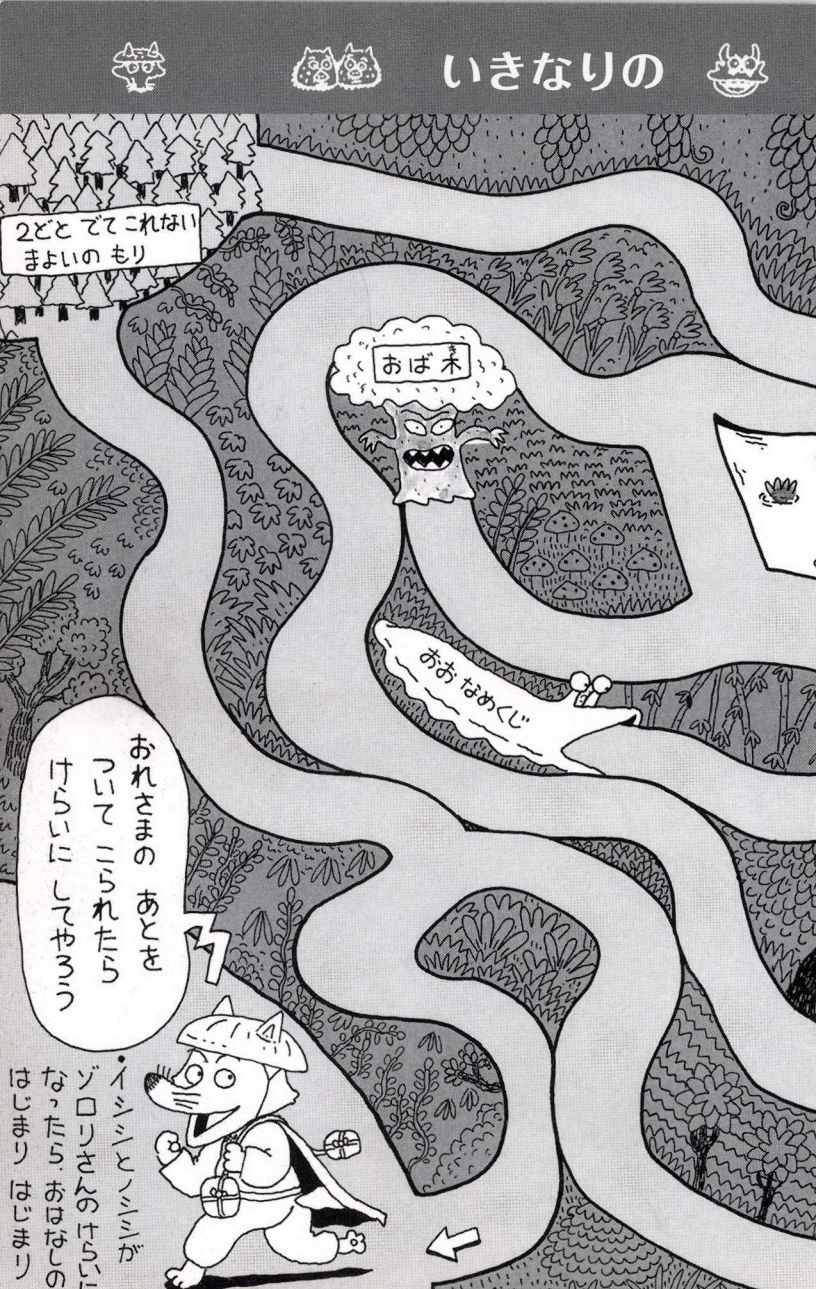
のんきなものです。

しかし、この歌声をききつけて、

黒いかげが、三人にしのびよっていたのです。

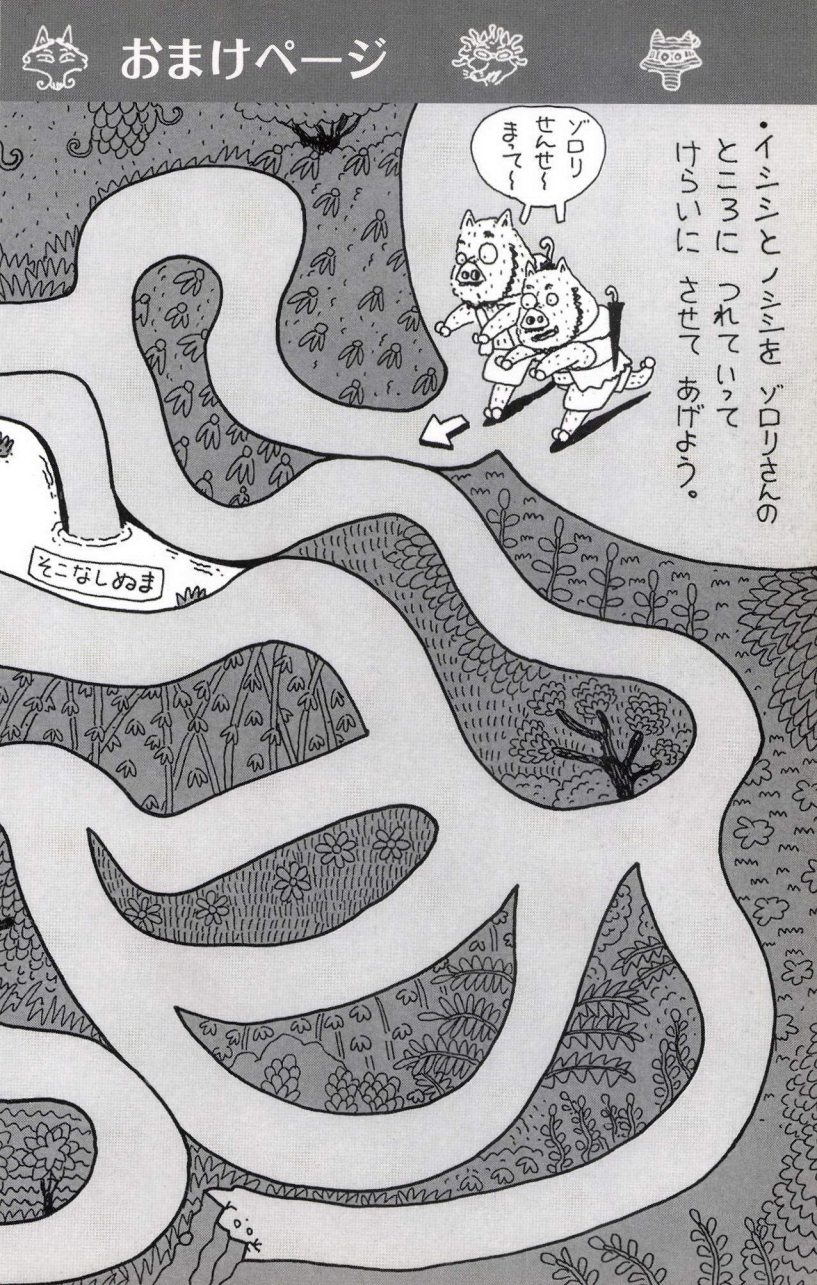
灰色の雲から見えかくれする月明かりにてらされて、きょうもゾロリは、いたずらのしゅぎょうで旅をつづけていました。

いきなりの

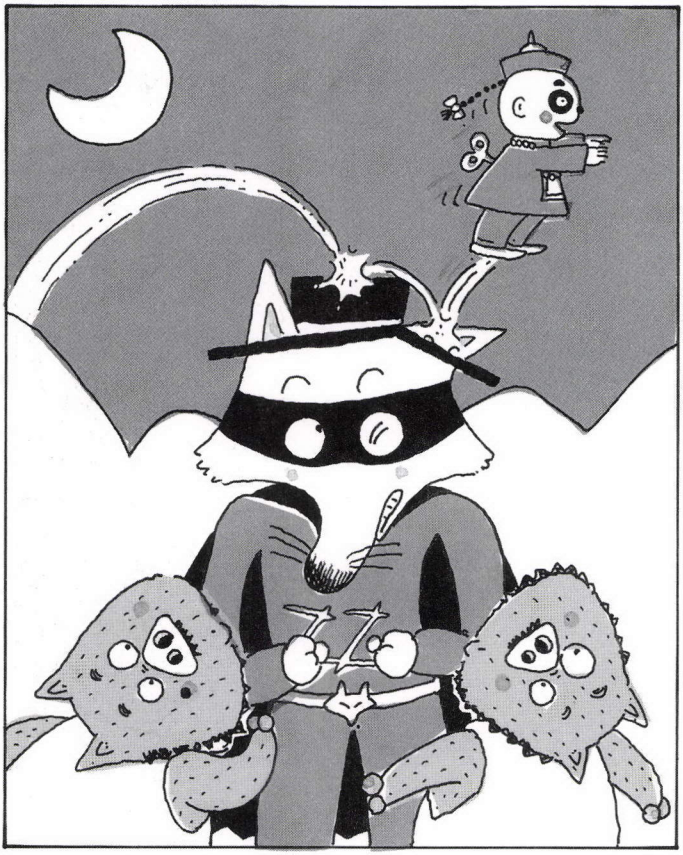


・イシシとノシシが
ゾロリさんの けらいに
なったら おはなし の
はじまり はじまり

おまけページ


・イシシとノシシを ゾロリさんの
ところに つれていって
けらいに させて あげよう。
ゾロリ
せんせ〜
まって〜
そこなしぬま

かいけつゾロリの きょうふのやかた



夏は アイスクリームか
シャーベットがうまいよな。
アイスクリーム

あついときは、からだが
つめたくなるまで、
ぱっくん ぱっくん
たべようぜ。

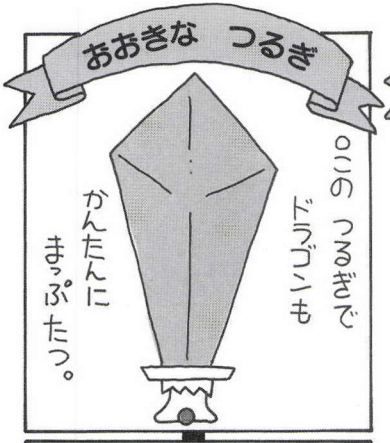
おい、みんな、つめたいもの
たべすぎると、おなか
いたくなるみたいよ。
トイレ
ギュルルルルル

おいしい たて
●おかしで できている。ドラゴンが むちゅうで たべている すきに やっつける。
よろよろい
●あまりの おもさに よろけて しまいます。
てつのパンツ
●よろよろいを かうと おまけに ついて きます。
けん剣
●ひとりでに とびはねる けん。
みえないよろい
ちゅうい
●いちど ぬぐと どこに おいたのか わからなく なりますので、きをつけて ください。
ドラゴンたいじのときは、ぜひ、わたしたちの店へお立ちよりくださいね。
ゾロリ先生のごすいせんも、いただいております。
この おみせの しなものは、せかいーです しょうじきな わたしが すいせん いたします から、まちがい ありません ですよ ゾロリ

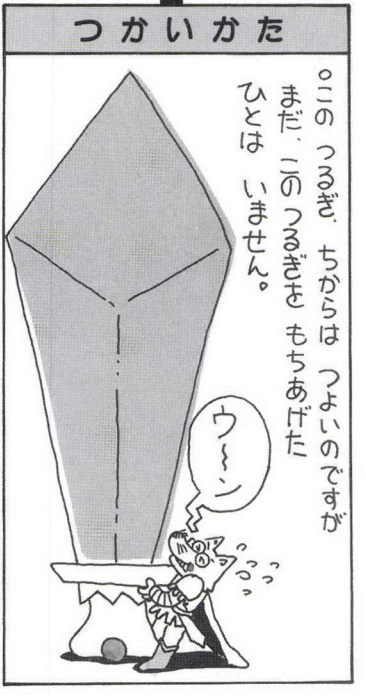
こちょこちょ つるぎ

つかいかた

おおきな つるぎ



つかいかた



おもしろヘルメット

●これをかぶればあなたもだいへんしん。

じゃん剣

○じゃんけんには100パーセントかてます

○でんしずのうでぐー・ちょき・ぱーをだします。

●じゃんけんずきのドラゴンには、

このけんがいちばん!!

つかいかた

ギャハハハ へんなかお〜

●ドラゴンがわらいこらげているすきに…

げげっ

やっつけます。

つかいかた

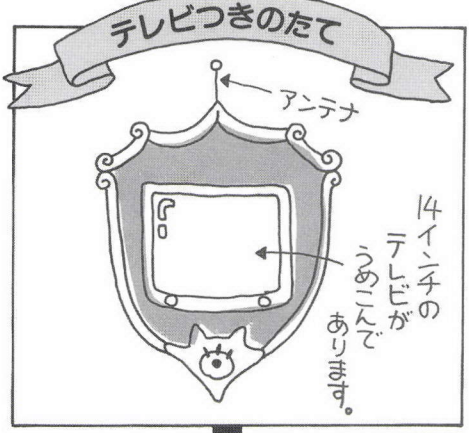
おい じゃんけんしようぜ

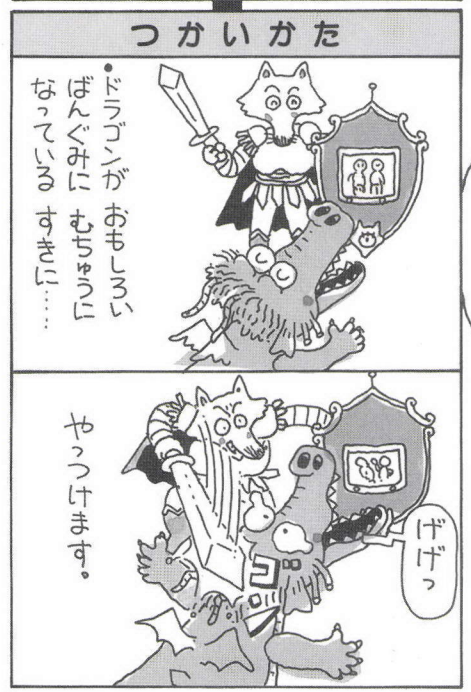
まいった〜

どうだ!

おまけのページ

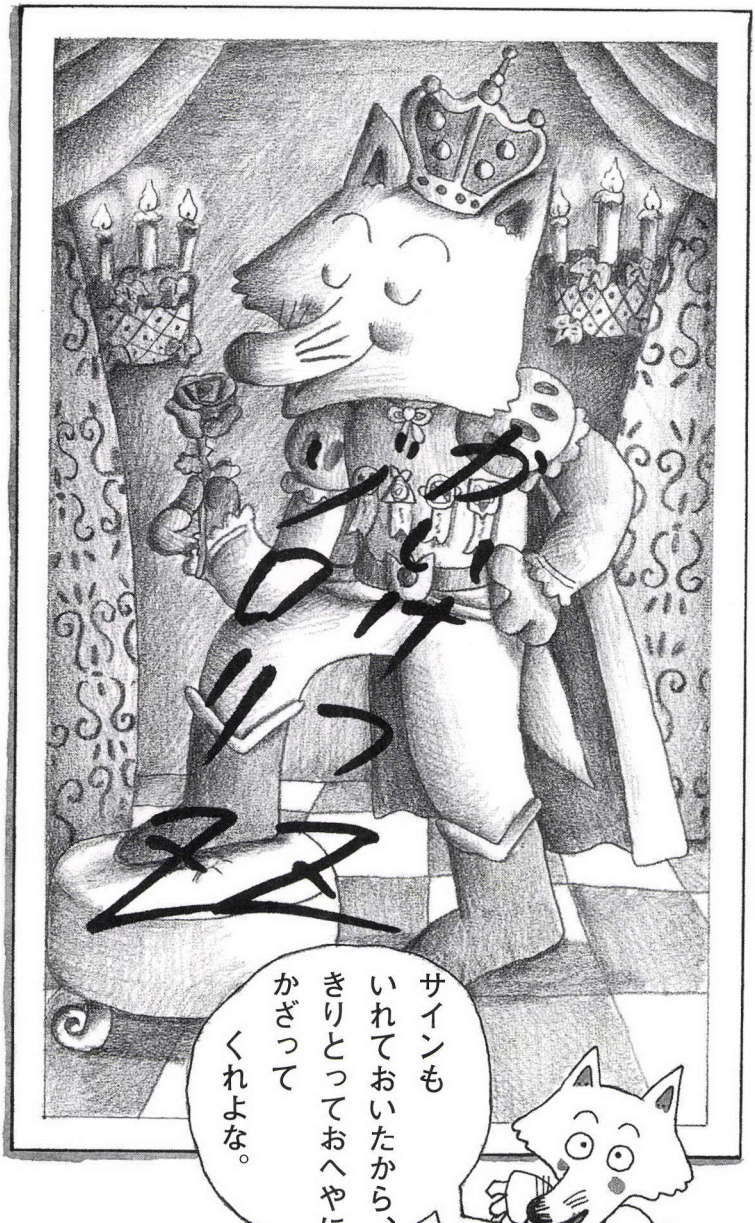
ドラゴンたいじ せんもんてんの 新製品カタログ

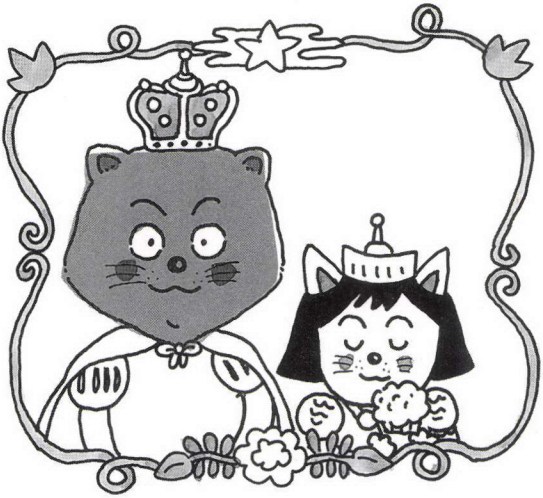




おまえたちの
おかげで、計画は
めちゃくちゃになった
んだ。いっしょに
旅するなんて、
いやなこったい。
こどくな男のひとり旅
にゃあ、仲間は
いらねえぜ。

ぼくたち、国をおいだされちゃいました。ゾロリ先生、旅につれていってください。
ゾロリ先生、ぼくたちを見すてないで。お役に立ちます。グスン。
ゾロリのこどくな旅はつづくのです。

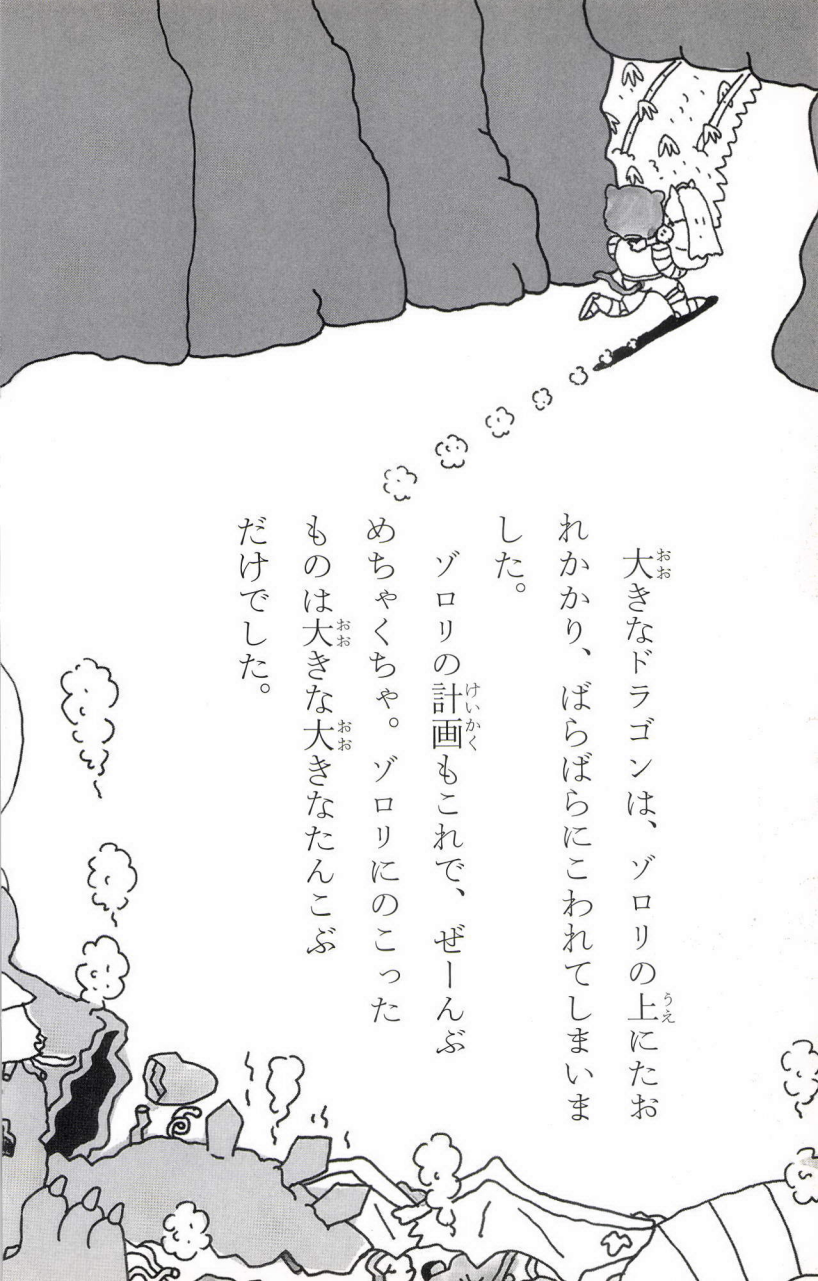

サインも
いれておいたから、
きりとっておへやに
かざって
くれよな。



お姫さまをぶじにすくいだしたアーサーは、ふたたび国じゅうのひとたちにむかえられ、めでたく、王子さまになりました。

いっぽうゾロリは、ふたたびしゅぎょうの旅に出発しました。左の写真は、ゾロリが王子さまになったときのためにつくっておいたブロマイドです。

グスッ
さいしょっから
おれさまはな、こんな
ちっちゃな国の王子など、
なりたくなかったんだ。もっと
大きな国の王子になってやるか
ら、いいよーだ。
それまでまっててね、ママー。
ウエーン……
ゾロリさん、
ごめんね。
ゾロリさん、
ごめんね。



大きなドラゴンは、ゾロリの上にたおれかかり、ばらばらにこわれてしまいました。

ゾロリの計画もこれで、ぜーんぶめちゃくちゃ。ゾロリにのこったものは大きな大きなたんこぶだけでした。

ん？
いやな予感。

「いち　にの　さん！」
声をあわせて、右足も左足もまえにとびだしたから、たいへんです。ドラゴンはバランスをうしなって……

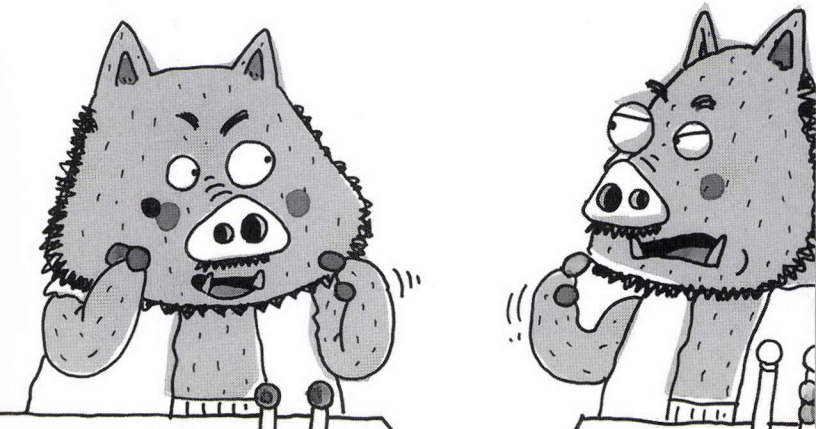
「いや、おらが左足でペッチャンコだ。」

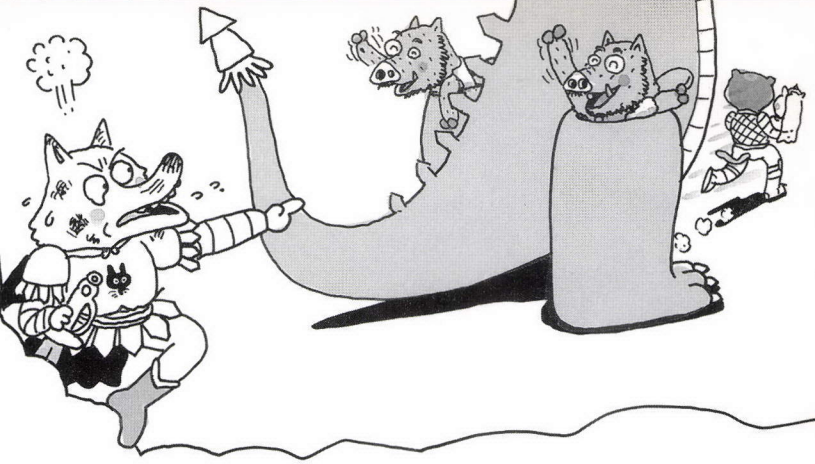
イシシがいいます。

ふたりとも自分がふみつぶして、ゾロリにほめられたいのです。

そこでまぬけなイシシが、いいことを思いつきました。

「いちにのさんで、いっしょにふみつぶそう。」





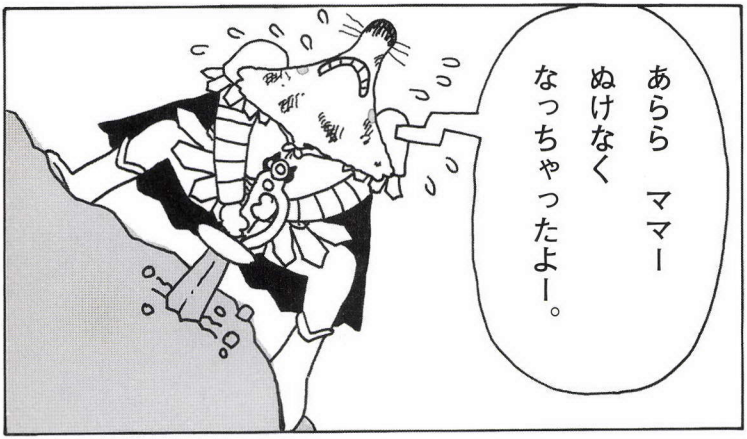
「なんだと、にがしてなるものか。おい、いのししきょうだい。アーサーもお姫さまも、ドラゴンの足でふみつぶしてしまえ！」

ゾロリは、すごいけんまくです。

ドラゴンの足のなかでは、イシシもノシシもはりきって、

「よーし、おれが右足でペチャンコにしてやるぞ。」

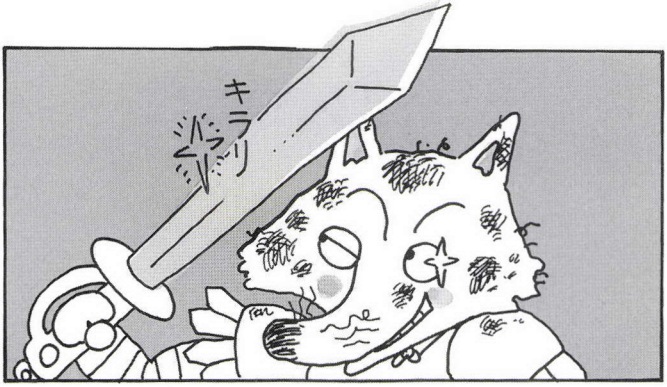
ノシシがいいました。



「さあ、いまのうちです。
お城へもどりましょう。」
アーサーは、お姫さまを
だきかかえました。

さすが、
アーサーはひらりと
身をかわします。
すると
ゾロリの剣は、どうくつ
のかべに
グサリとふかく
つきささって
しまいました。

ゾロリは、
思いきり剣を
ふりあげ、
アーサーに
きりつけました。
「あぶなーい。」
お姫さまは、
思わず目を
つぶりました。

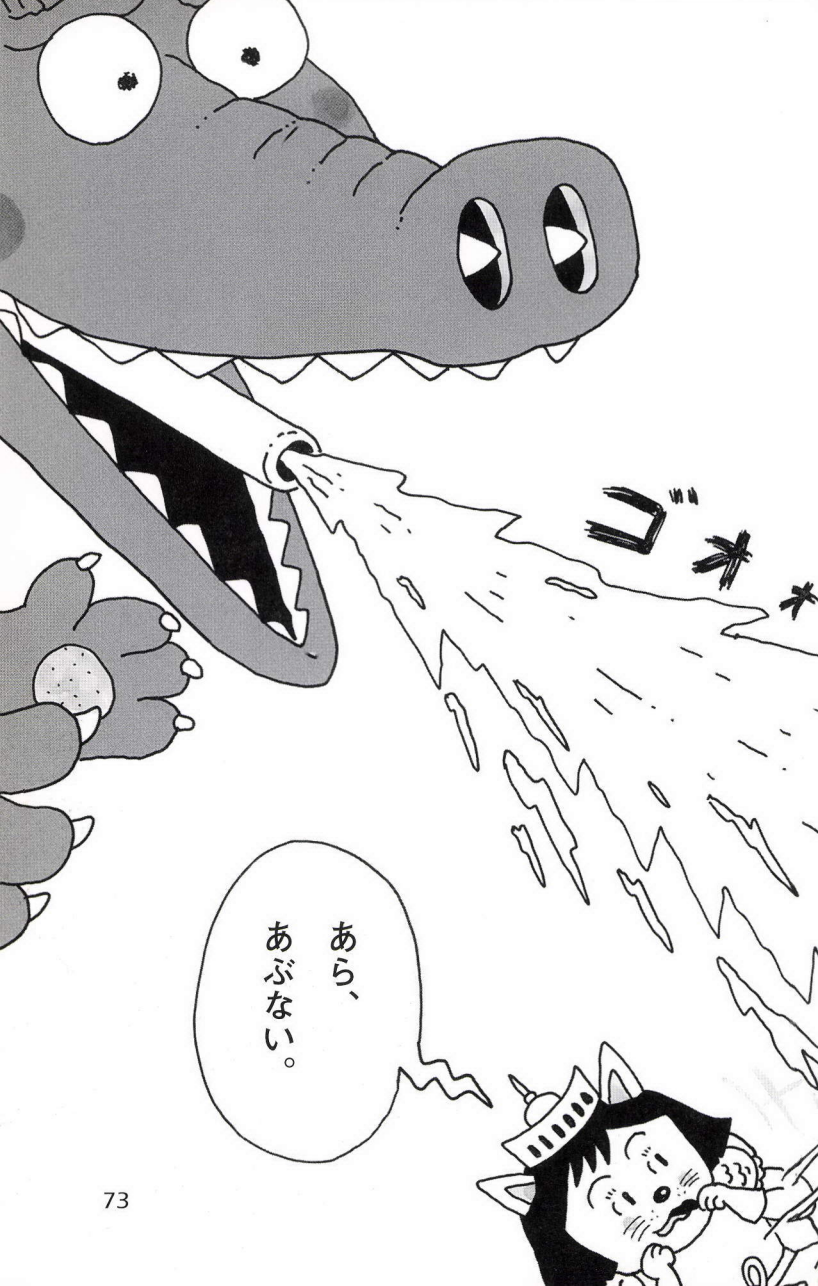


「えーい、ドラゴンにたよるまでもない。勇者、ゾロリさまが、岩をもきりさくこの剣で、おまえをまっぷたつにしてやろう。ニヒニヒニヒ。」

「アーサーは、剣をもっていないわ。ゾロリさん、ひきょうよ。」

お姫さまがさけびます。

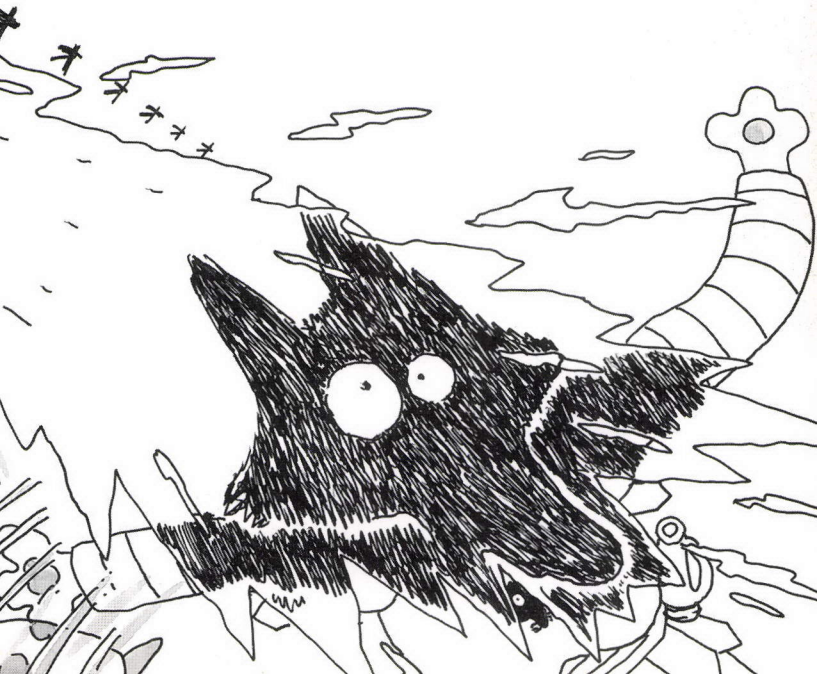
「ニヒニヒ、おれさま、ひきょうがだいすきなのでね。」


ゴオオ
あら、
あぶない。

ゴオオオオ――ッ

ざんねんでした。青いボタンは、口から炎をはくボタンでした。

ちょうどドラゴンの口の下に立っていたゾロリは、炎をまともにうけて、まっ黒けー。

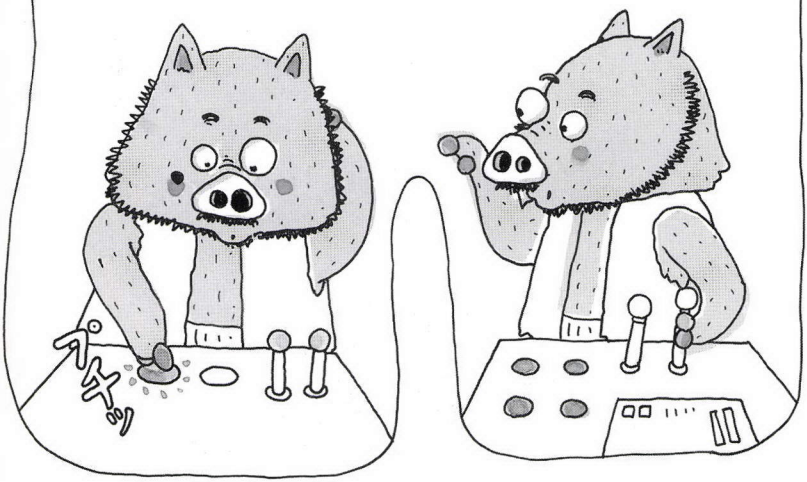


ところが、ドラゴンの足のなかでは、イシシとノシシがもめていました。

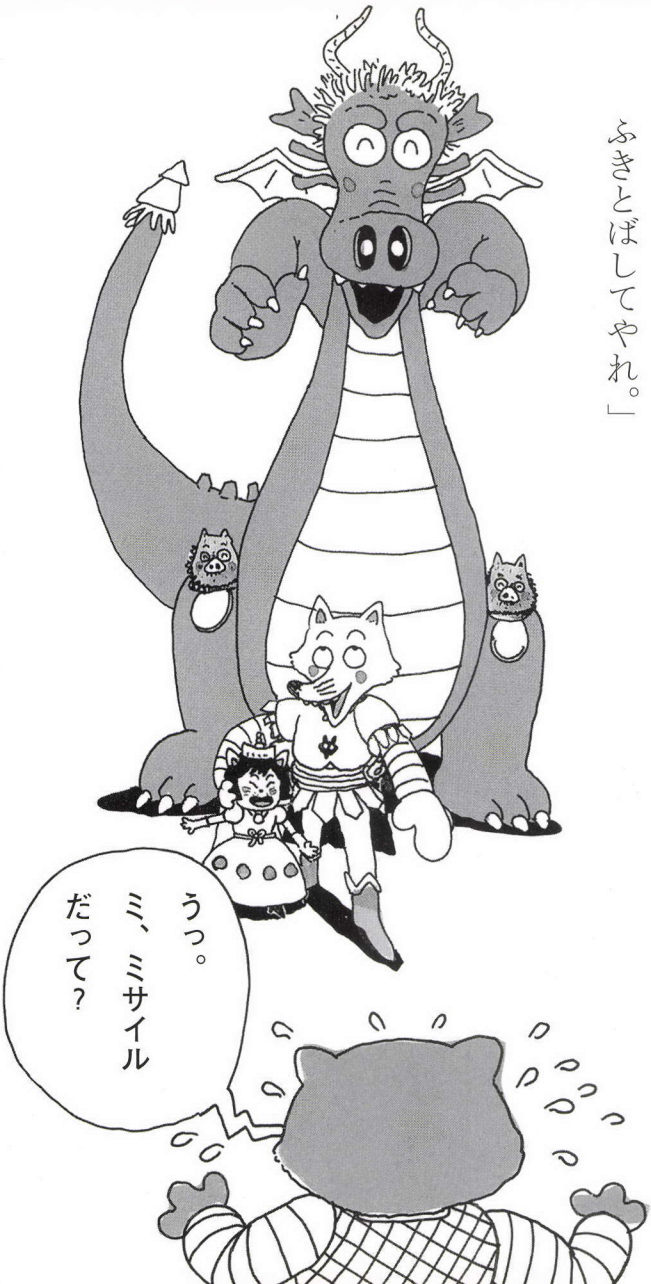
「えっと、ドラゴンミサイルのボタンは、青いボタンだな。」

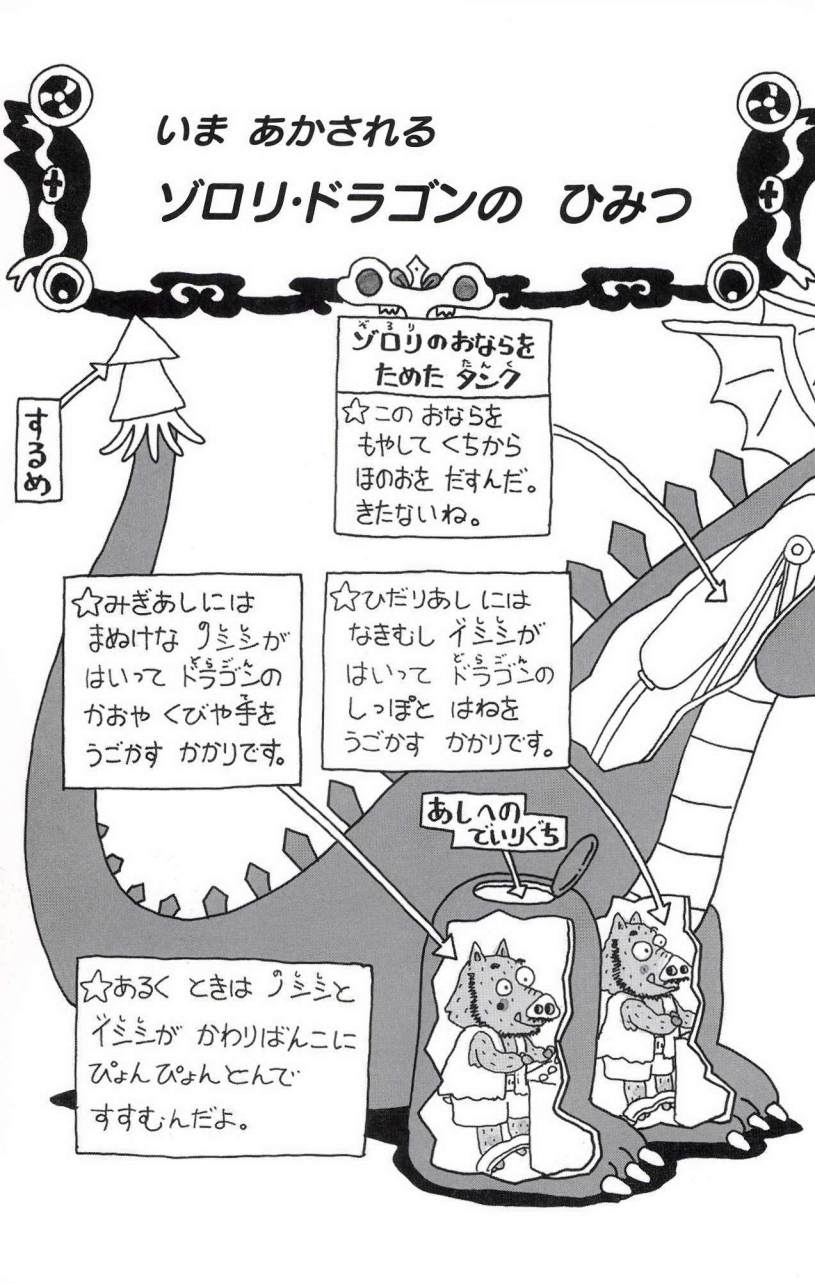
「ちがうよ。赤だったよ。」

「おら、男の子だから、やっぱり青がいいな。青おそうっと。」



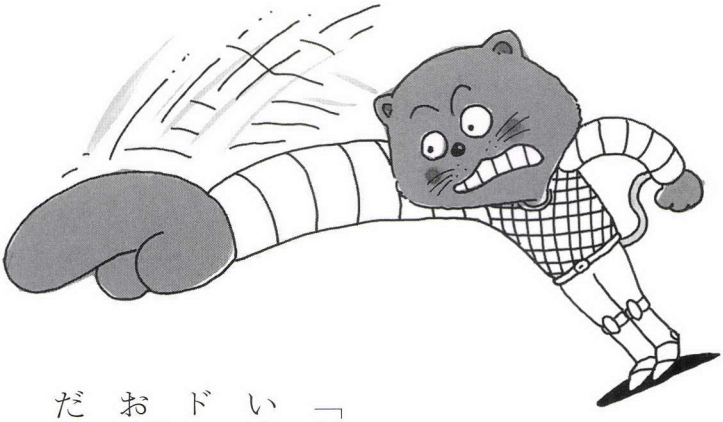
「さあ、アーサーにドラゴンミサイルをプレゼントして、ふきとばしてやれ。」




いま あかされる
ゾロリ・ドラゴンの ひみつ
ゾロリのおならをためた タンク
☆このおならをもやしてくちからほのおをだすんだ。きたないね。
するめ
☆みぎあしにはまぬけなゾミミがはいってドラゴンのかおやくびや手をうごかすかかりです。
☆ひだりあしにはなきむしイミミがはいってドラゴンのしっぽとはねをうごかすかかりです。
あしへのでいりぐち
☆あるくときはゾミミとイミミがかわりばんこにぴょんぴょんとんですすむんだよ。

☆毛は とうもろこしの けを はりつけ たんだ。
☆目は かいちゅうでんとう。100メートル さきまで てらせるよ。
ドラゴン・ミサイル
☆はなの あなから ミサイルを はっしゃ できる
かえん ほうしゃき
☆手には スポンジが はって あって おひめさまを やさしく つかむよ。
お姫さまを とりかえしたけりゃ、おれさまのドラゴンとまた たたかうんだな、ニヒヒヒ。
たすけて、アーサー。

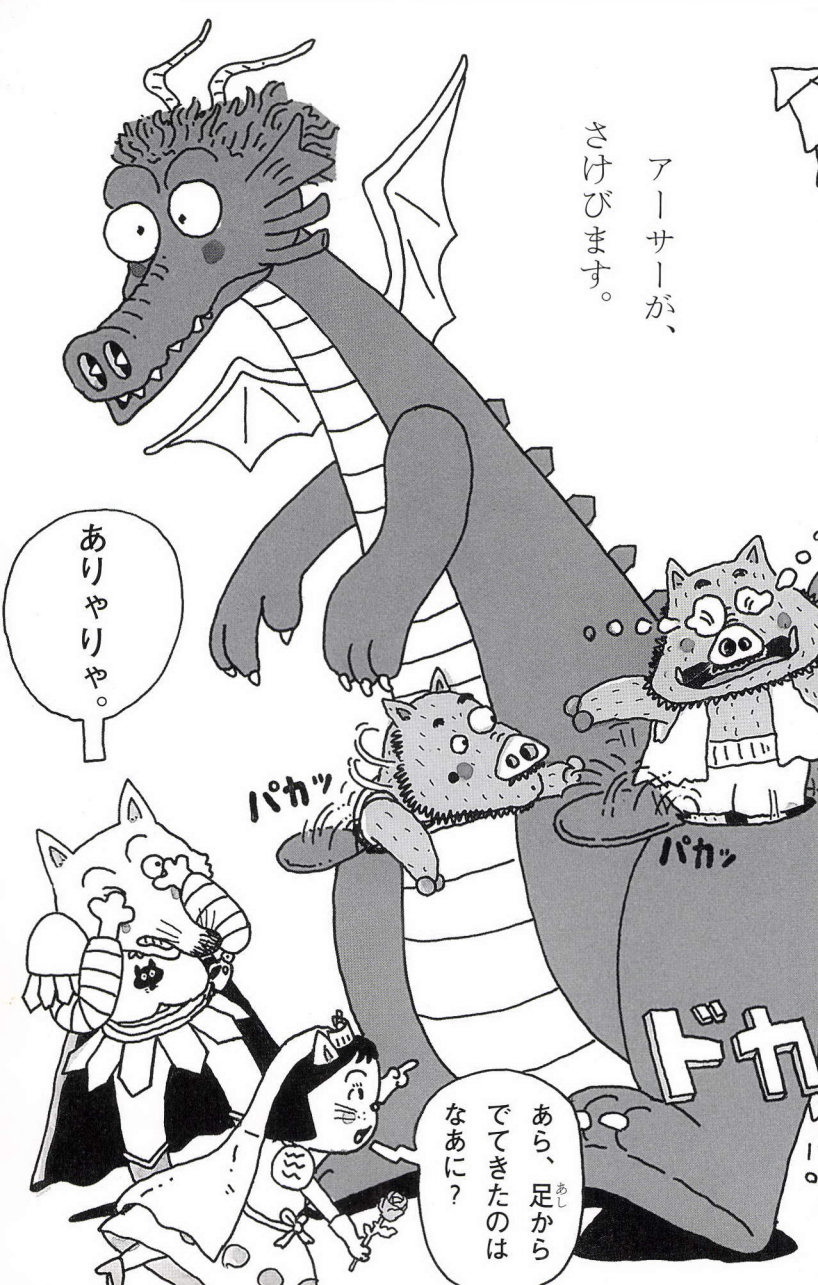
いまごろ気づいても、もうおそーい。さあ、イシシにノシシ、おれさまのつくったドラゴンのいりょく、たっぷりお見せしなさい。
へーい。
へーい。
ポイ



「ゾロリ先生、どうしよう。ばれちゃったみたいだよ。」

イシシとノシシは、ゾロリにかけよりました。

「わかったぞ、ゾロリさん。いや、ゾロリ、おまえがドラゴンをあやつってお姫さまをさらったんだな!!」


アーサーが、
さけびます。
ありゃりゃ。
パカッ
パカッ
ドカ
あら、足からでてきたのはなあに？

おおむすびが、ドラゴンの左足に思いきりぶつかると、

「ウエーン、いたいよー。」

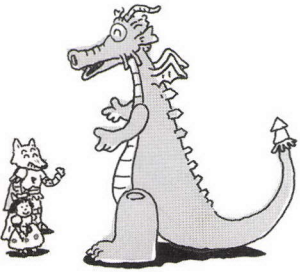
あらら、ドラゴンの足から、なきむしイシシがとびだしてきました。すると、

「イシシ、だいじょうぶか？」

こんどはドラゴンの右足から、まぬけなノシシがかおをだしました。

「そうか、やはりドラゴンはつくりものだったんだ。」

おおむすびはいきおいよく大蛇の口からとびだすと、
ゴロゴロ　ゴロゴロ
ドラゴンにむかって、
ころがっていきます。



ああ、
すっきりした。

アーサーは
大蛇のおなかで
ぷっくりふくらん
でいるおおむすび
を……

おなかが
おもいよ〜

タァ〜〜〜

思いっきり
キックしました。

ドカ

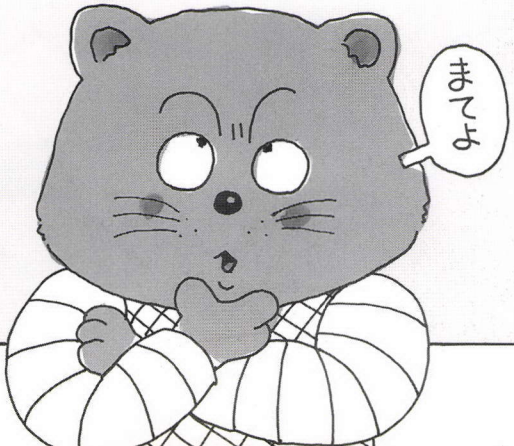
ゲッ

う〜〜
くるし〜〜い
そうだ!!

さっきからこのようすを見ていたアーサーは、ドラゴンのたいどがおかしいと思いました。ゾロリがちょっと剣でつついただけでこうさんしたり、ゾロリのごきげんをとったりしているのですから。

そのとき、ウーン、ウーンと、うなる声がちかづいてきました。

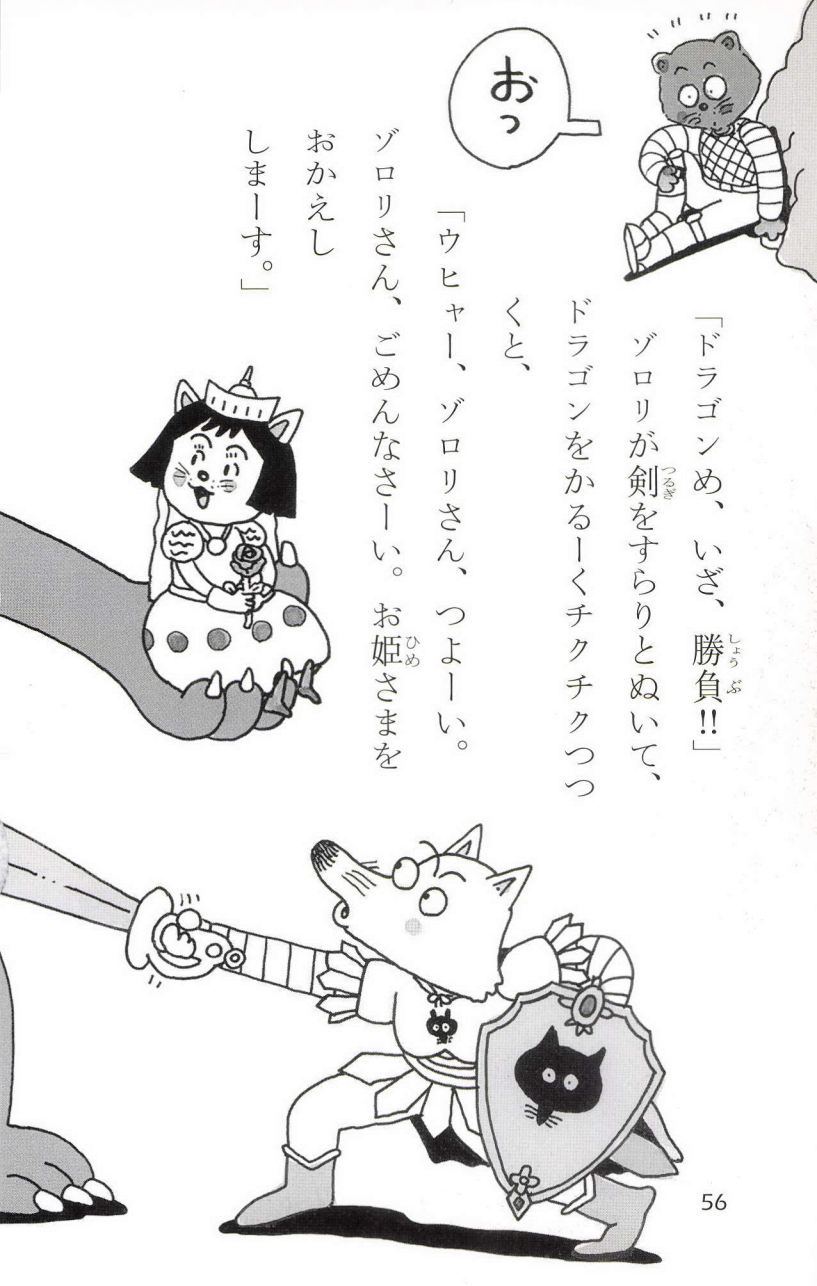
さっきおおむすびをのみこんでしまった大蛇が、どうくつにはいってきたのです。



ぼくのかつやく
見(み)てくれた　ママー
ぼくをほめてよ　ママー
勇者(ゆうしゃ)とよべるはただひとり
その名(な)はゾロリ
かいけつゾロリー

「ゾロリさんって、つよいのねえ。」
お姫さまが、うっとりしていると、よこから
ドラゴンまでもが、
「そうだとも。けっこんするなら、ゾロリさんが
いちばんだよ。このドラゴンが保証するぜ。」
と、ほめだしました。
ゾロリはごきげんです。

ドラゴンは、とつぜんしゃべりだし、
かんたんにこうさんしてしまいました。



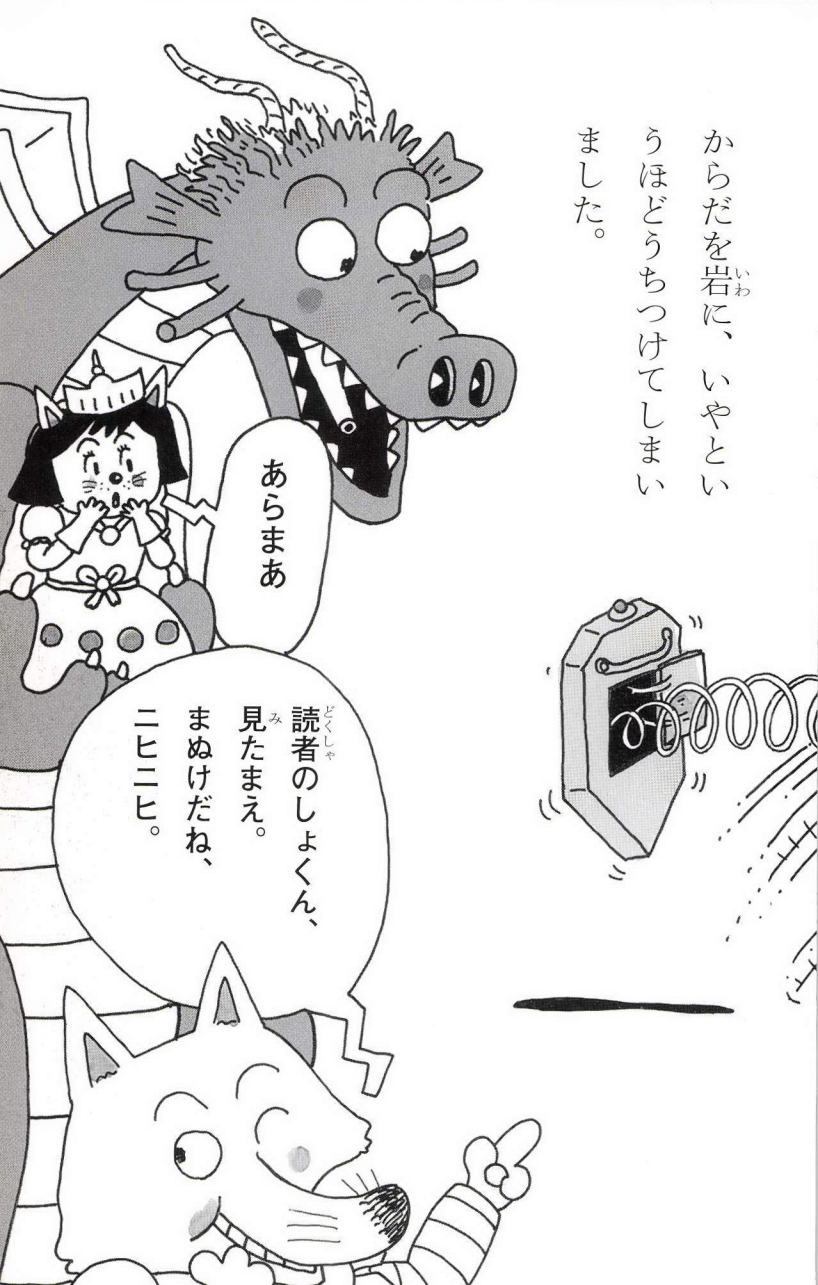
「ドラゴンめ、いざ、勝負!!」
ゾロリが剣をすらりとぬいて、
ドラゴンをかるーくチクチクつっくと、
「ウヒャー、ゾロリさん、つよーい。
ゾロリさん、ごめんなさーい。お姫さまを
おかえし
しまーす。」

お姫さまはバラの花をにぎりしめ、
「なんてロマンチックなおかたなんでしょう。」
と、つぶやきました。

「ワッハッハ。ごらんになりましたか、お姫さま。アーサーにドラゴンはたおせそうもありませんね。しかし、ご安心ください。」

ゾロリは、バラの花をぽんとお姫さまになげあげていいました。

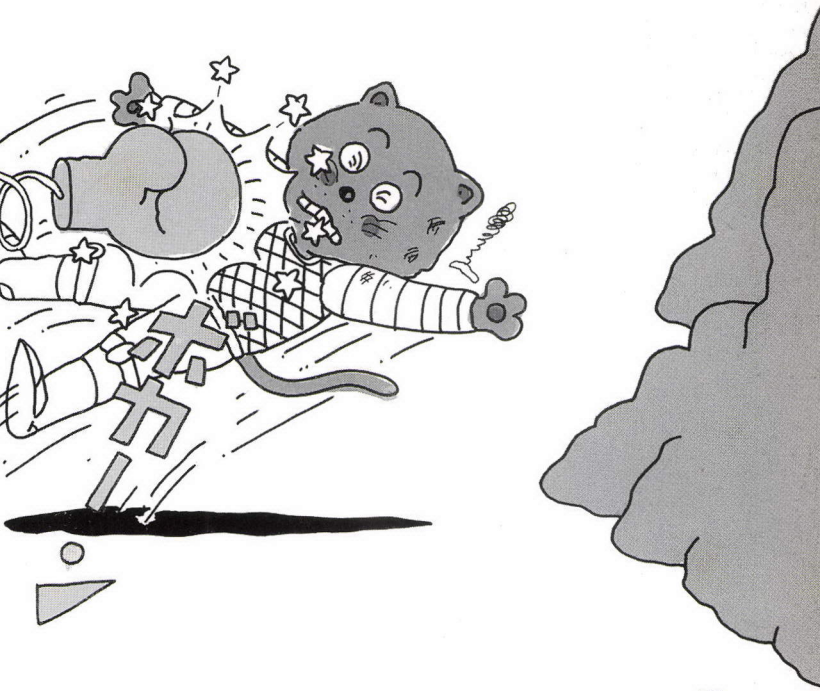
「その花のかおりでもたのしんでいるあいだに、わたくし、ゾロリが、ドラゴンをたいじしてみせましょう。」


からだを岩に、いやというほどうちつけてしまいました。
あらまあ
読者のしょくん、見たまえ。まぬけだね、ニヒニヒ。

ボカ〜〜〜〜〜〜ン

ひみつのたてからは、必殺(ひっさつ)パンチがとびだしました。

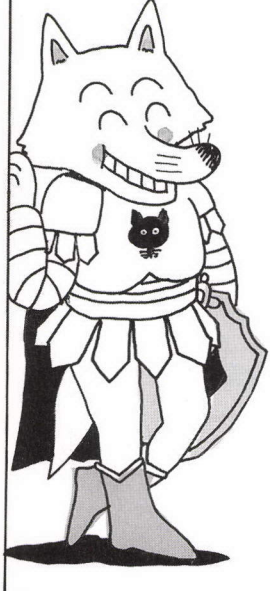
でもざんねんながらパンチは、ドラゴンのほうではなく、アーサーのほうにとびだしたからたまりません。アーサーはふっとんで、

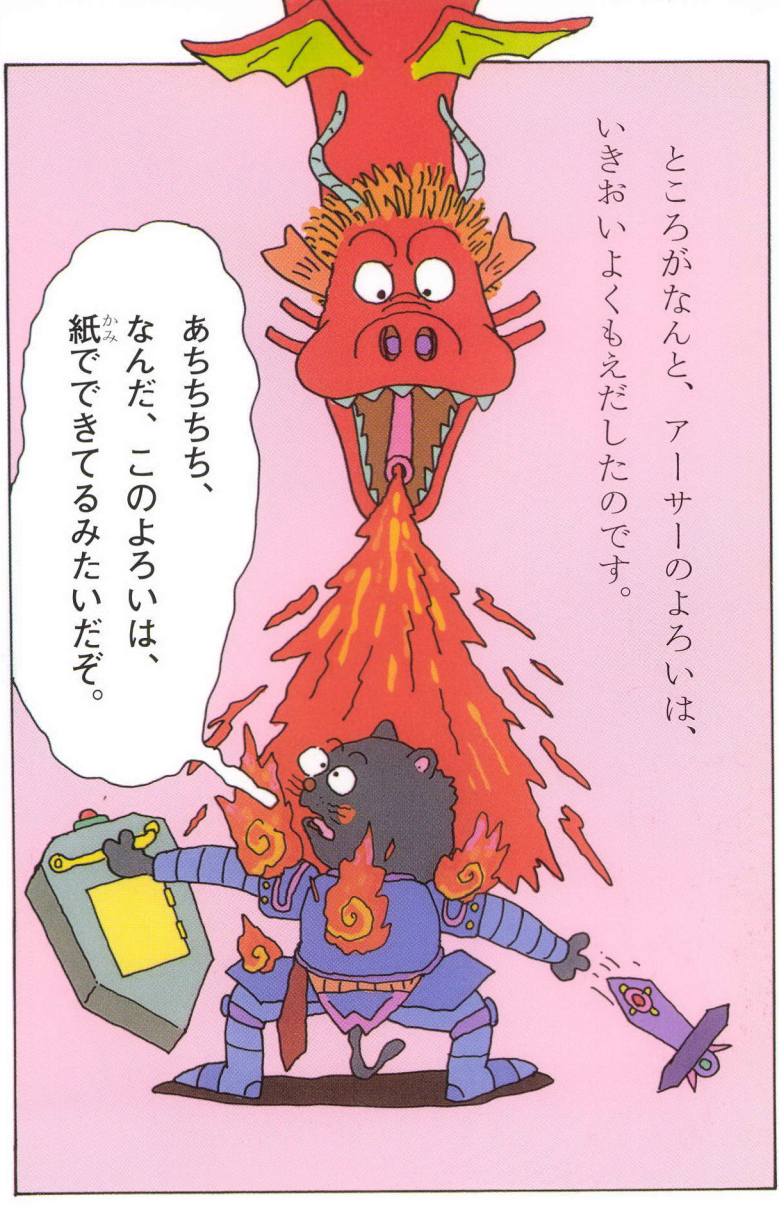


「ニヒニヒ。そのすがたじゃ、ドラゴンはたおせそうもないね。」

いつのまにか、ゾロリがそばに立っていました。

「ゾロリさん、だいじょうぶ。ぼくにはひみつのたてがあるんです。いざというとき、このボタンをおせば……。」




ところがなんと、アーサーのよろいは、
いきおいよくもえだしたのです。
あちちちち、
なんだ、このよろいは、
紙でできてるみたいだぞ。

と、アーサーに
むかって火をはきました。
「だいじょうぶ、ぼくはこのじょうぶな
よろいにまもられているからね。」

剣の刃があとかたもなくきえています。それもそのはず、水晶のような刃は、氷でできていたのですから、ここにくるまでにとけてしまったのです。それを見たドラゴンは、口を大きくあける

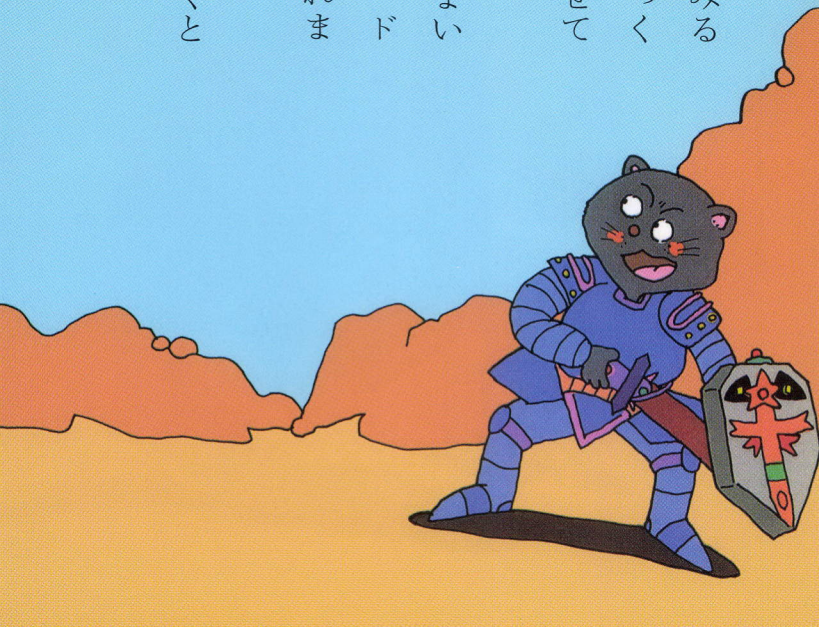
しくしく
しくしく

アーサーがどうくつへはいってみると、お姫さまをかかえた、あのにっくきドラゴンが、目をぎらりと光らせて立っていました。

「お姫さま、アーサーがたすけにまいりました。この水晶のような剣で、ドラゴンをたいじしてごらんにいれましょう。」

アーサーがいきおいよく剣をぬくと

……

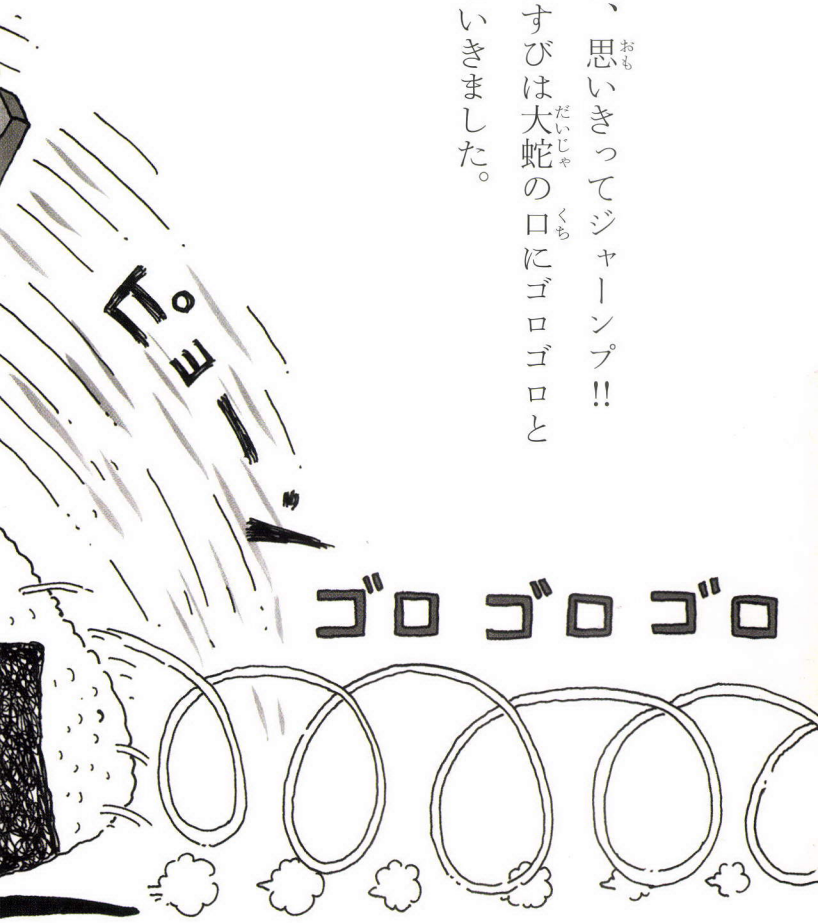


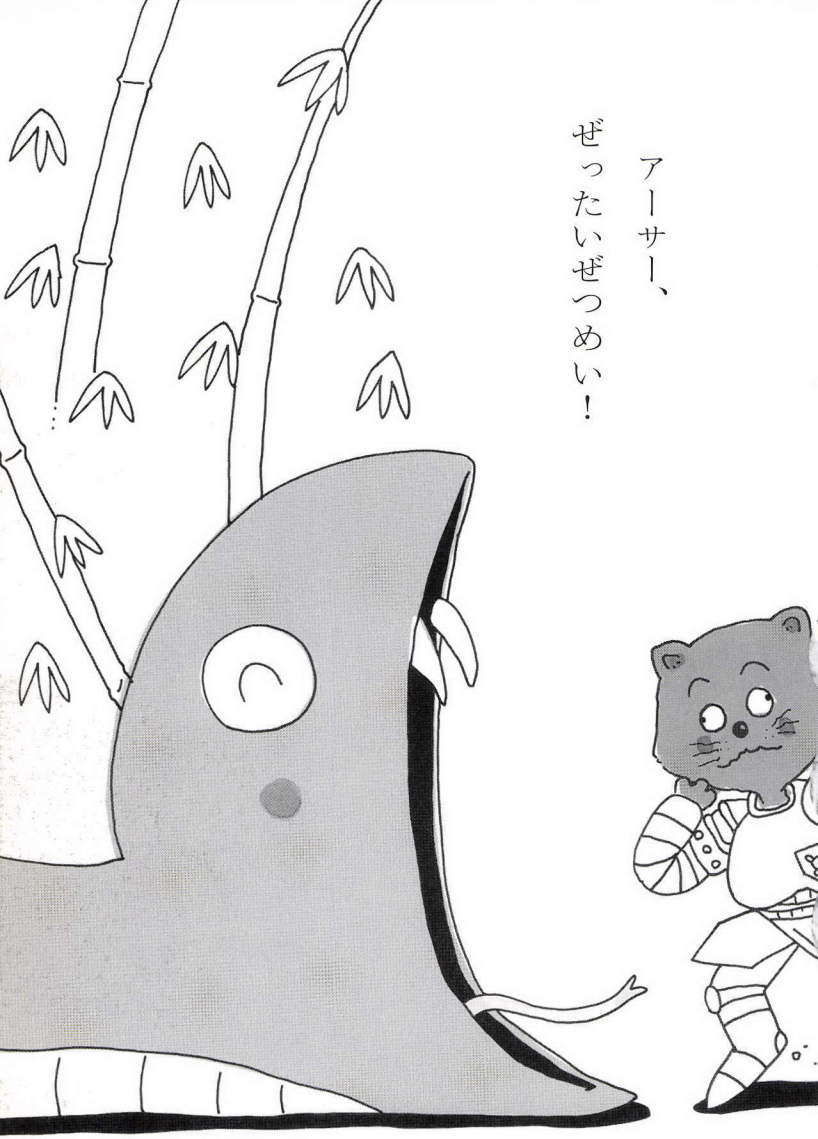
そのとき、近くのどうくつから、地面のそこをゆさぶるようなおそろしいなき声がきこえてきたのです。
グェ〜〜ッ

おおむすびをまるのみして
しまった大蛇（だいじゃ）は、まるでバー
ベルのようになって、のびて
しまいました。

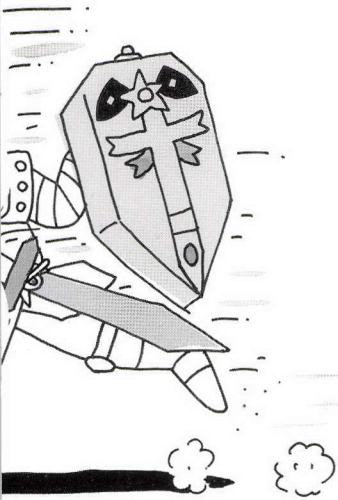
「このみがるなよろいのおかげで
たすかった。鉄のよろいなんかき
ていたら、きっとジャンプなんて
できなかったよ。」

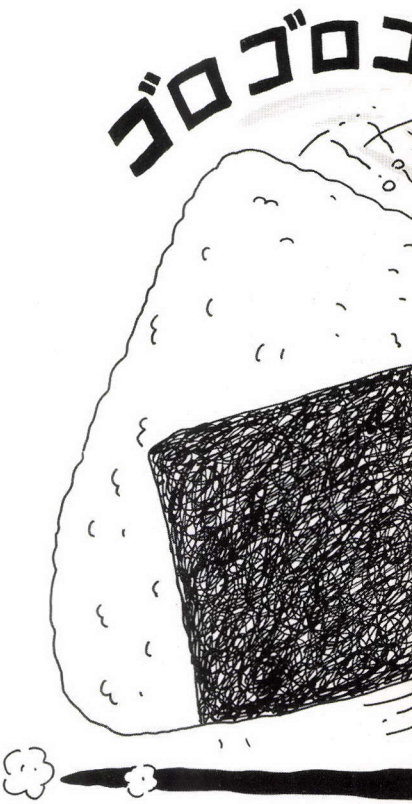
えーい、思いきってジャーンプ!!
おおむすびは大蛇の口にゴロゴロと
はいっていきました。




アーサー、
ぜったいぜつめい！

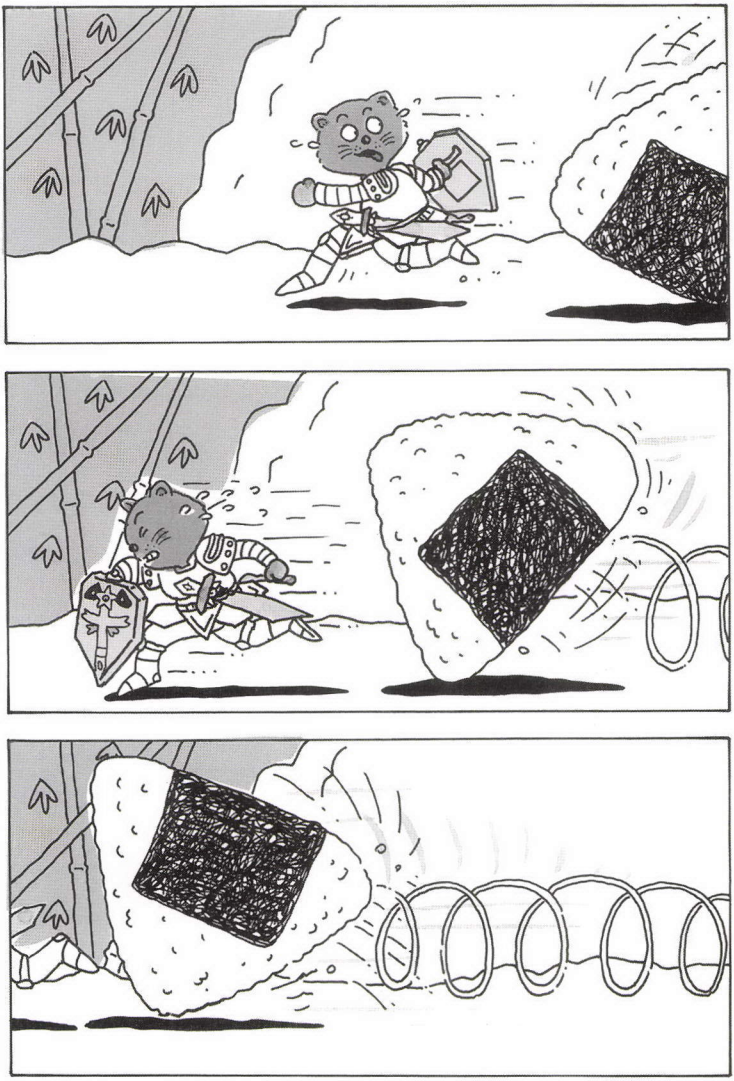
おおむすびのにおいにつられて、でてきた大蛇が、大きな口をぱっくりあけて、まちかまえていたのです。

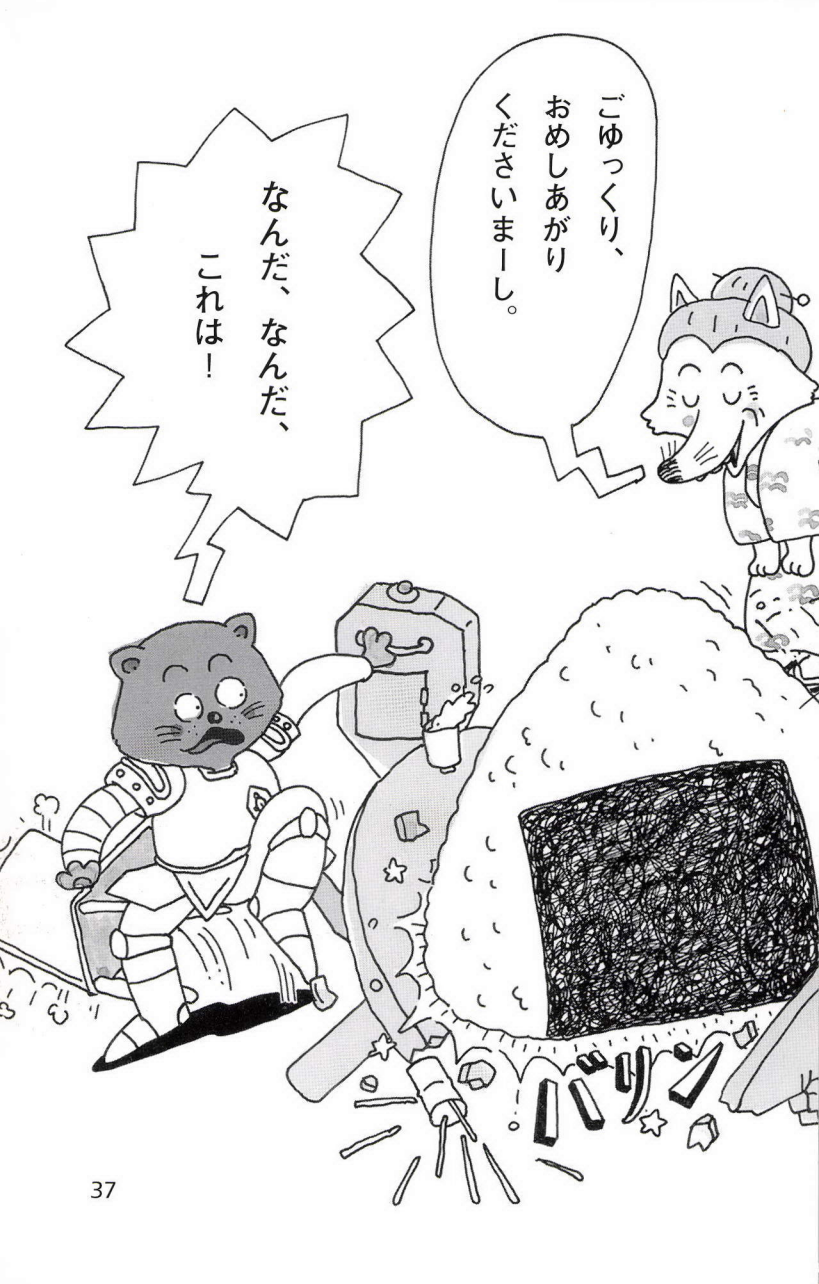




アーサーは、一本道をおおむすびから、ひっしにげました。でもおおむすびのスピードは、ますますはやくなるばかり。アーサーをおしつぶそうと、どんどんせまってきます。

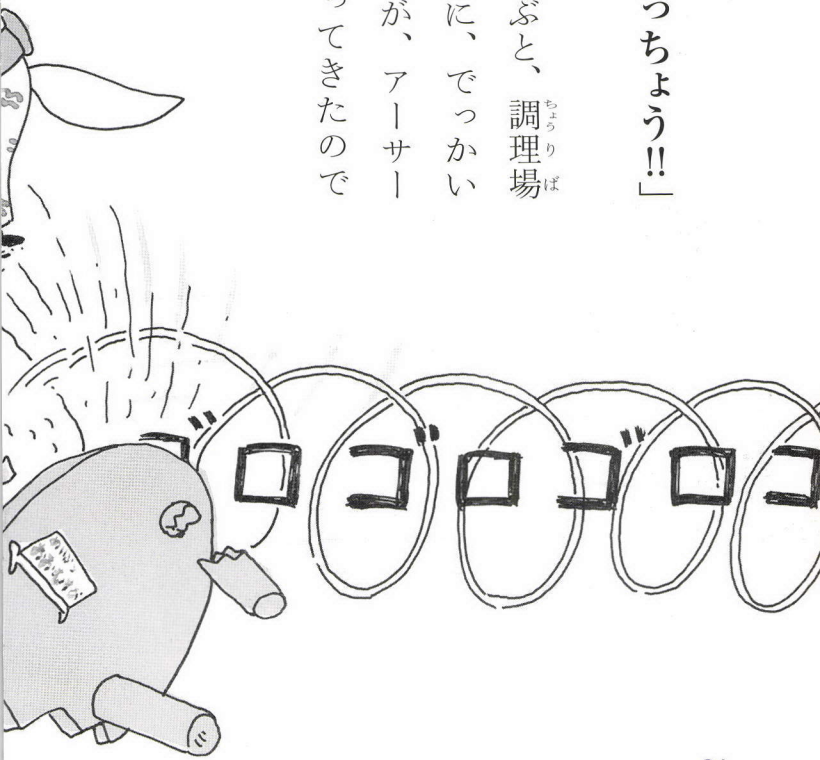
その上、アーサーの目のまえには……

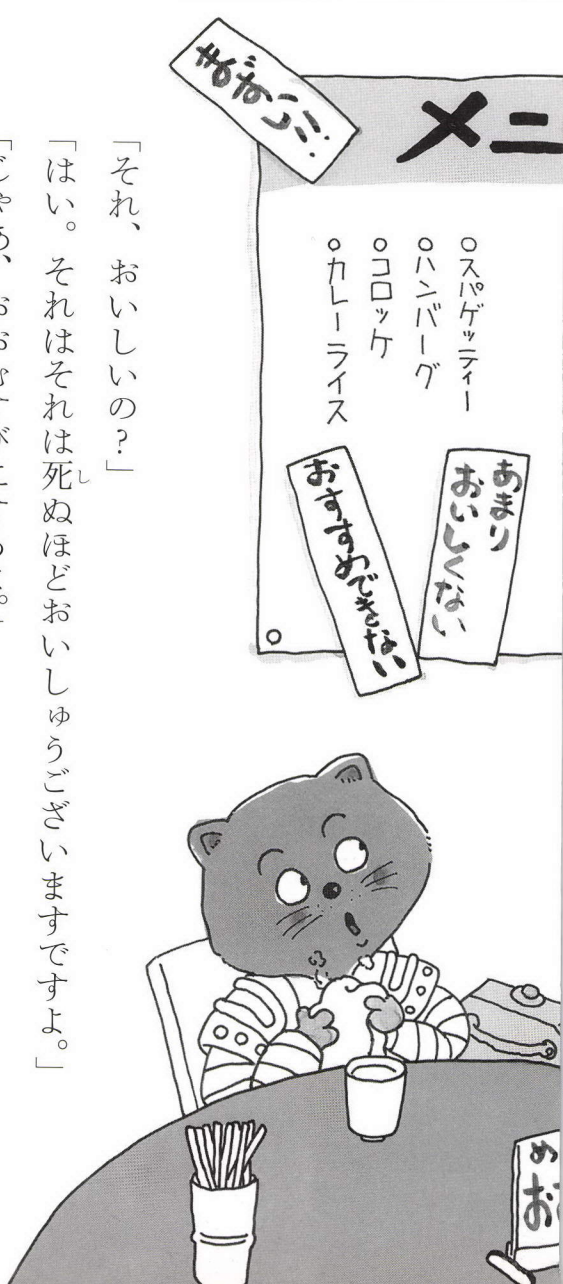



ごゆっくり、おめしあがりくださいまーし。
なんだ、なんだ、これは！
バリン

「おおむすび、いっちょう!!」

おばあさんがさけぶと、調理場からすごい音とともに、でっかいでっかいおおむすびが、アーサーにむかってころがってきたのです。





「それ、おいしいの？」

「はい。それはそれは死ぬほどおいしゅうございますですよ。」

「じゃあ、おおむすびにするよ。」

おばあさんは、にたりとわらって、

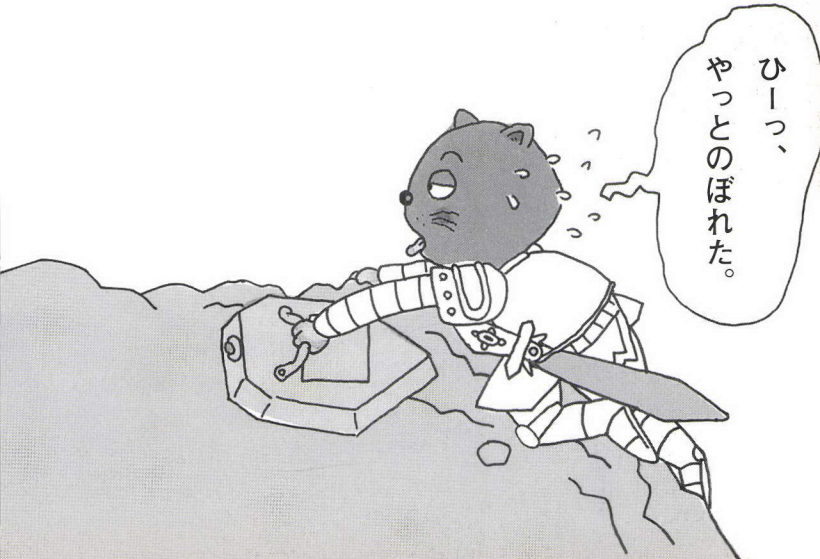
「おおむすびでよろしいんですね――。ヘッヘッヘ……。」

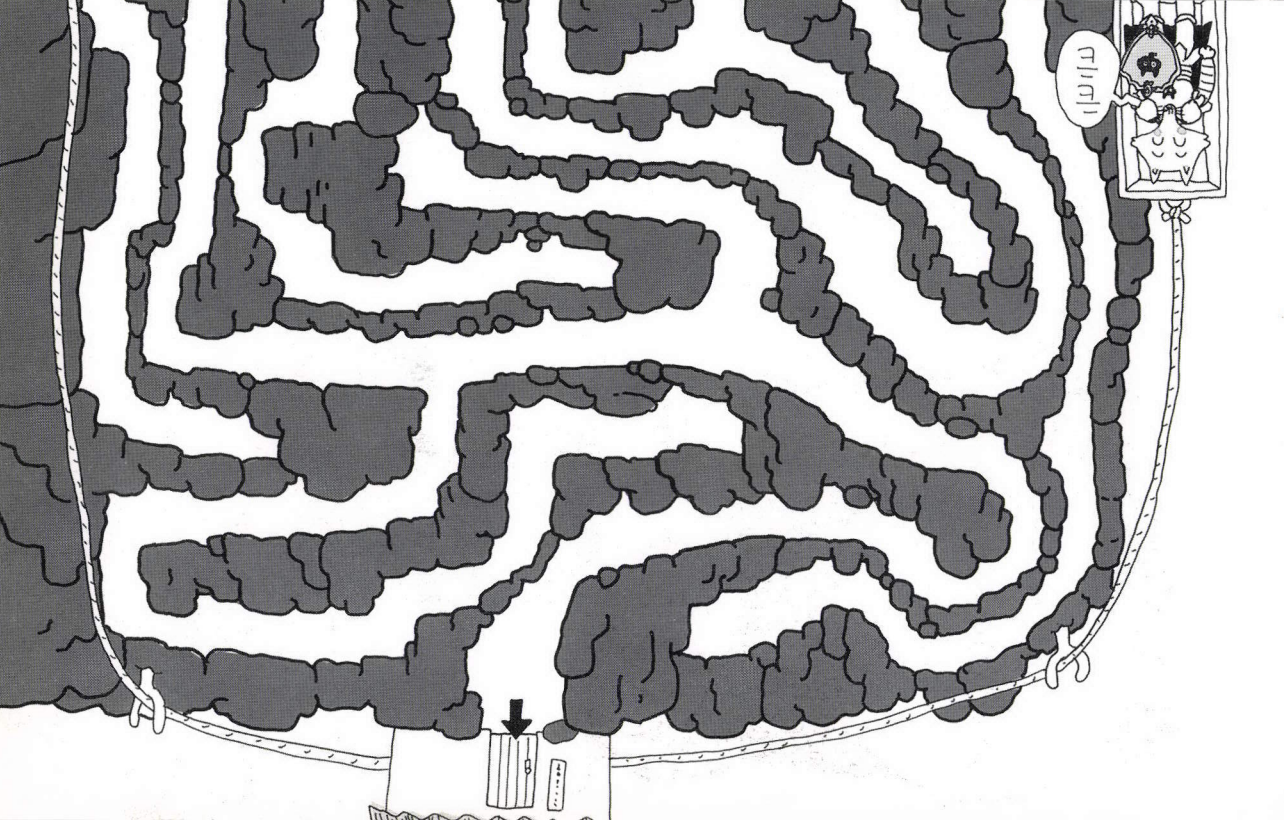
「ぼく、ハンバーグかスパゲッティーがいいな。」
「お客さま、この店の名物、おおむすびがよろしゅうございますですよ。」
「うーん、ぼく、スパゲッティーにしようかな。」
「いやいや、ドラゴンたいじには、みなさん、かならず、おおむすびをたべていかれますですよ。」

これがむかしからのきまりでございますでございますよ。さあさ、どうぞどうぞ。」

ゾロリは、エレベーターでがけをのぼると、茶店のおばあさんにばけて、アーサーをまちうけます。

「まあまあ、ごくろうさま。ドラゴンたいじの勇者のおかたですね。おつかれでしょう。この茶店ではらごしらえしていきなされ。元気をつけて、ドラゴンたいじ。




크크크

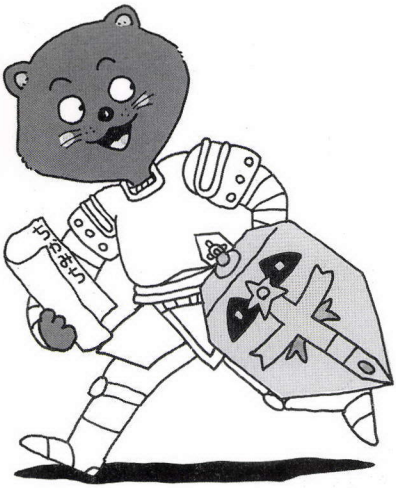
近道らしいぞ。
でもものがけのに
でもまに図地
こんこんで
ゾロこちんをひっぱり
あげるんだ。

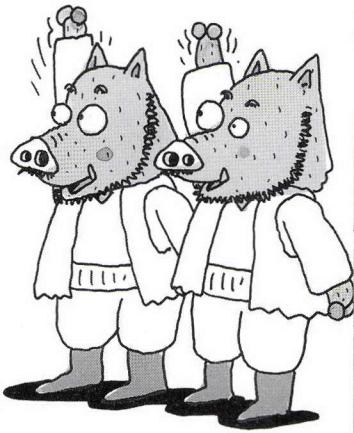
「黒ひょうのだんな、たいへんだよ。ゾロリさんはうら口からドラゴンたいじにでかけちまったよ。」

店員のイシシがいうと、ノシシが、

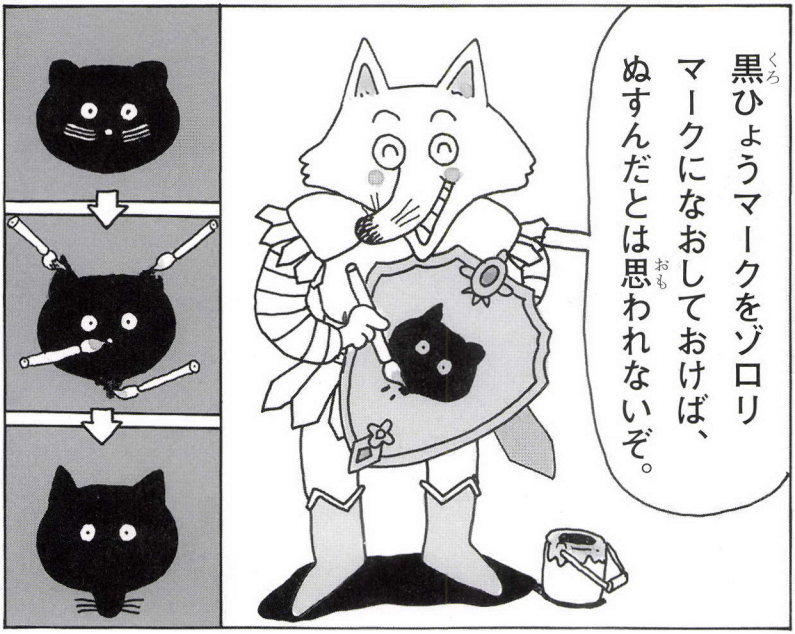
「ほれ、あんたにゃ、とくに近道の地図をやっから。」

「なにからなにまですまないね。」





ゾロリは、お店のうらで、アーサーのどんな剣もはねかえすよろいとたて、そして岩をもきりさく剣を身につけると、さっさとうら口からでていきました。

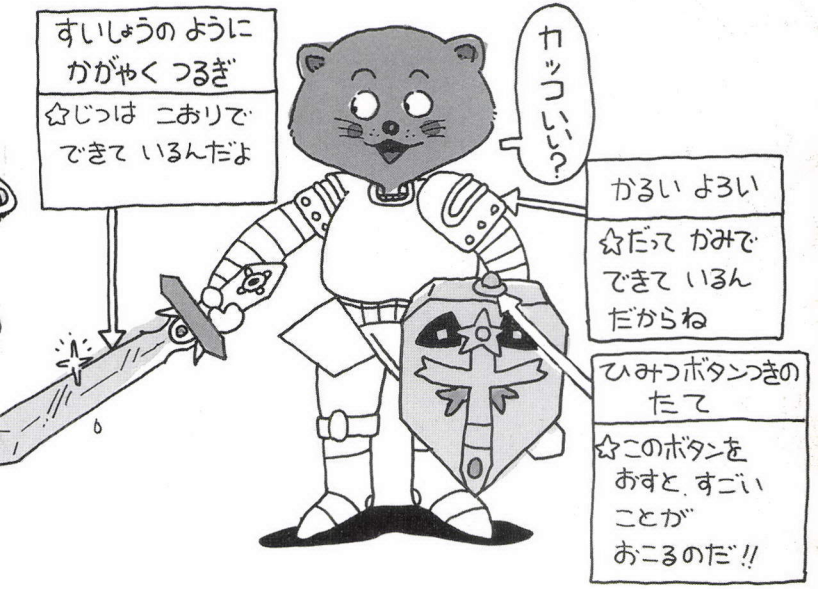


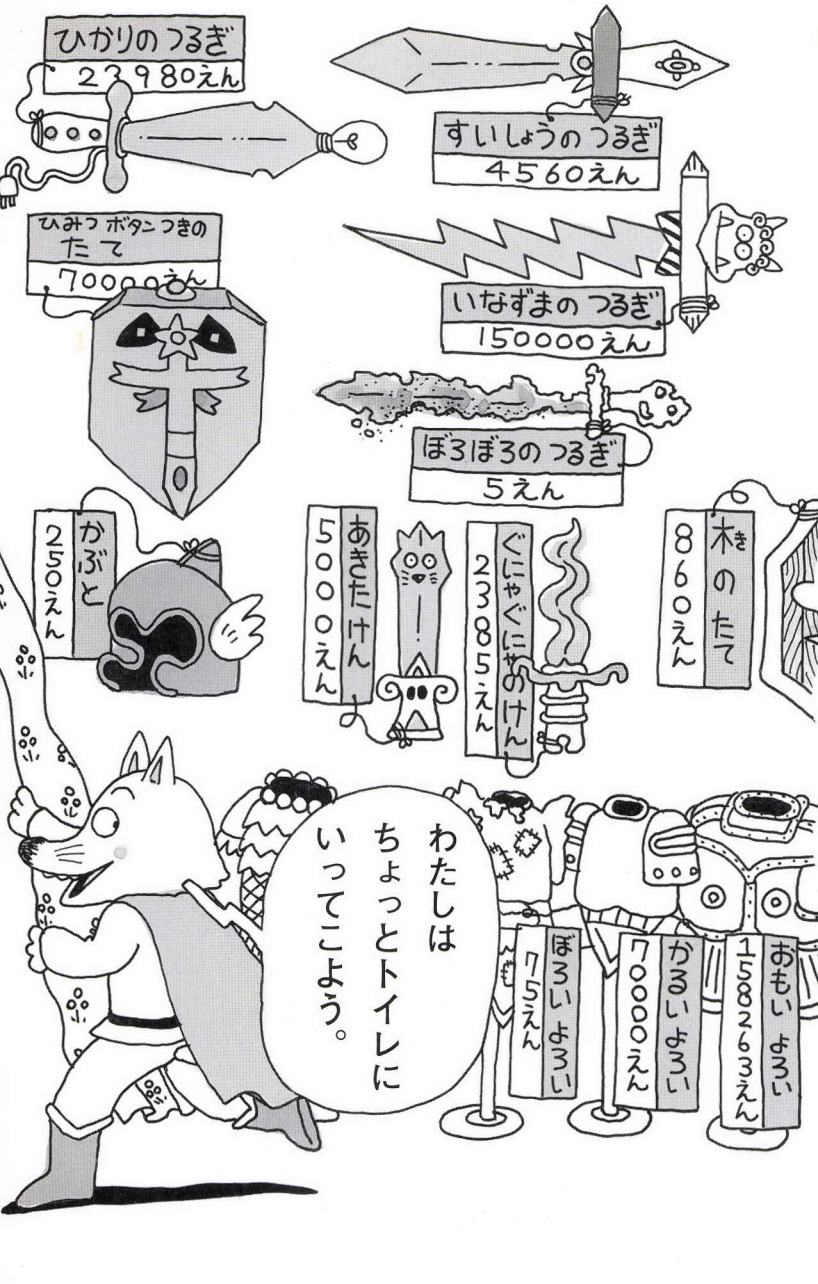
「へへへ、それはいざというときおしていただくと、おどろくべきことがおこる、とくべつサービスなんですよ。」

「いやー、いろいろありがとう、たすかるよ。」

「だんな、よくおにあいですぜ。その水晶のようにすきとおった剣。かるくてうごきやすいよろい。そしてぶあついたて。みんな、あなたをまもってくれるでしょう。」

「このたてについてるボタンは、なんだい？」

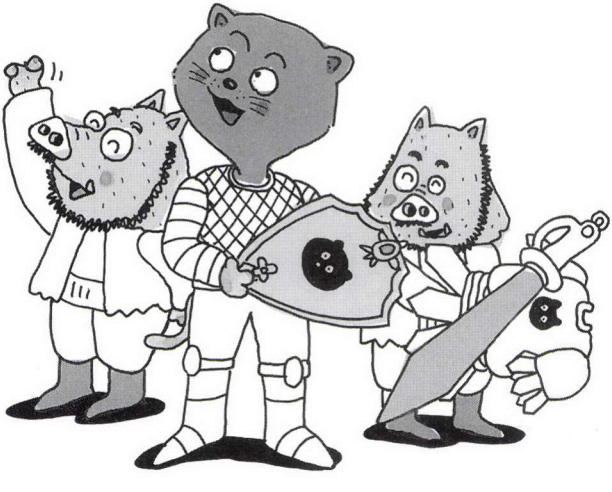



ひかりのつるぎ
23980えん
すいしょうのつるぎ
4560えん
ひみつボタンつきのたて
70000えん
いなずまのつるぎ
150000えん
ぼろぼろのつるぎ
5えん
かぶと
250えん
あきたけん
5000えん
ぐにゃぐにゃのけん
23885えん
木のたて
860えん
おもいよろい
1582263えん
かるいよろい
70000えん
ぼろいよろい
75えん
わたしはちょっとトイレにいってこよう。

「おやおや、黒ひょうのだんな、いまどきそんな古くさいよろいや剣じゃ、ドラゴンはたおせませんぜ。」

「わたしどもが、いちばんつよい道具をえらんで、あなたのよろいや剣とこうかんしてあげましょう。」

「そうかい、わるいなあ。」

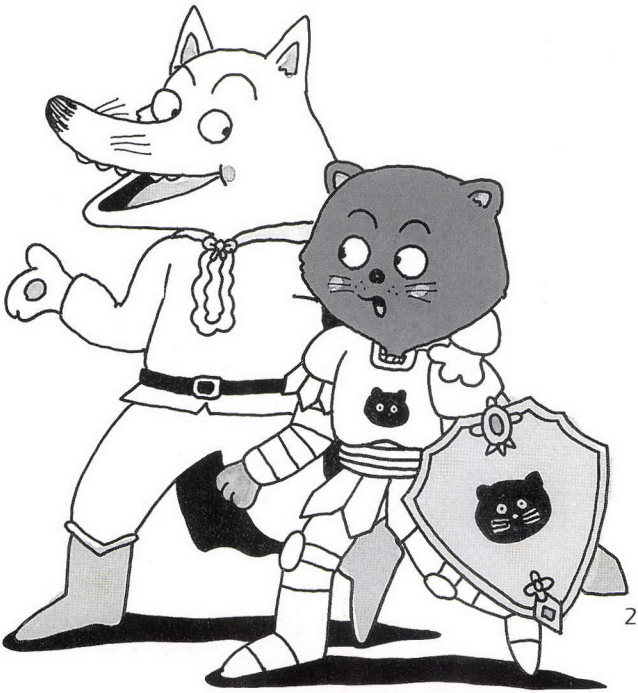


「いらっしゃいまーし。」
あいそのいい、ふたごの店員(てんいん)が、
かおをだしました。

ゾロリは、町はずれの『ドラゴンたいじせんもんてん』とかいてある、きたない店に案内しました。

「ここです、ここです。」

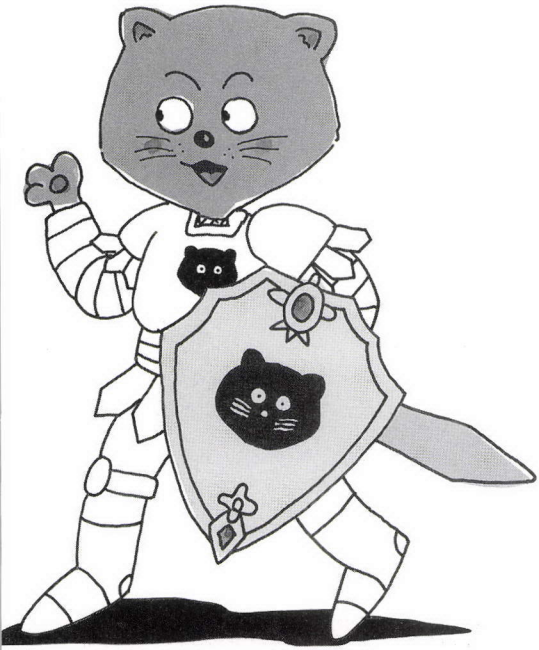
「おや、こんなところにこんなお店ができていたなんて、気がつかなかったなあ。」



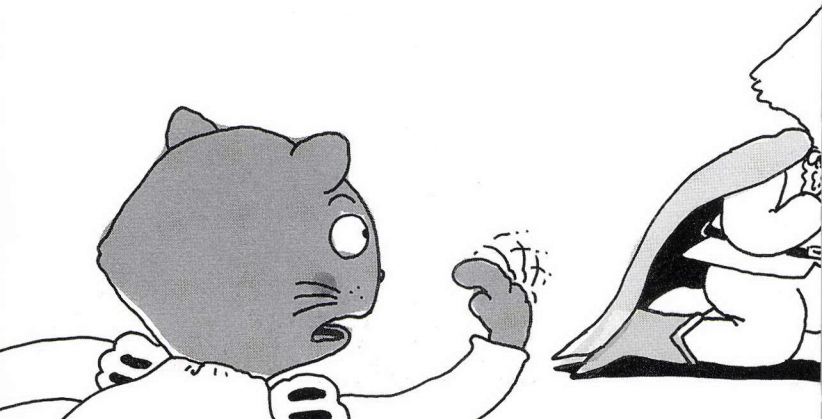
「いやいや、わたくしは、これから道具をそろえるのですよ。いい店を知っているから、あなたもちょっと見ていきませんか。」

アーサーは、いそいでうちにかえると、黒ひょう家に代々つたわる、どんな剣もはねかえす、よろいとたて、そして、岩をもきりさく剣を身につけて、やってきました。

「ゾロリどの、あなたはドラゴンとたたかうのに、なにも武器をもっていかないのですか。」



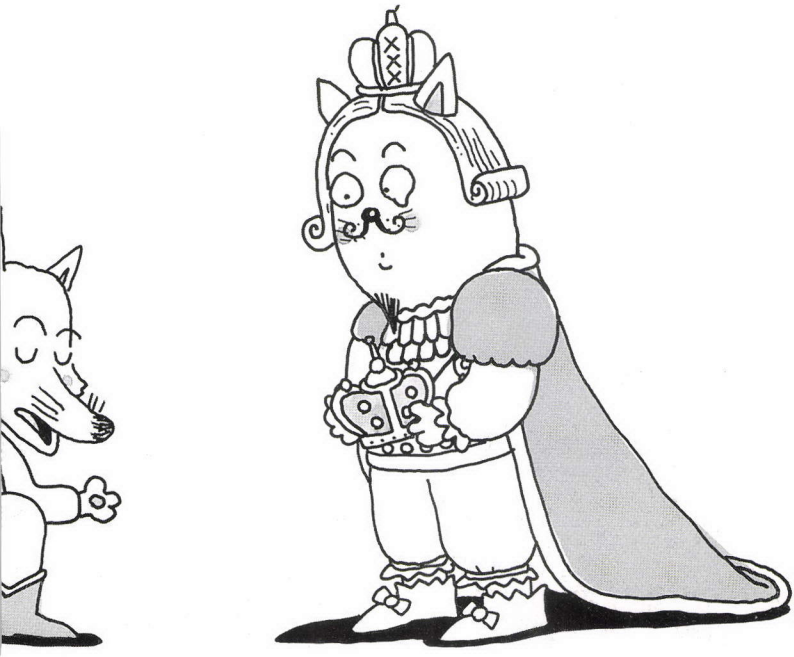
「き、きみはだれだね？」
「はじめまして、わたくし、旅する貴族、ゾロリともうします。旅のとちゅう、ブルル山で、さきほどの世にもおそろしいドラゴンを見かけました。わたしが、あのドラゴンをたいじして、お姫さまをぶじにつれかえりましょう。」
これをきいて、アーサーもいいました。
「ぼくだって、愛するお姫さまのために、ドラゴンたいじにまいります。」



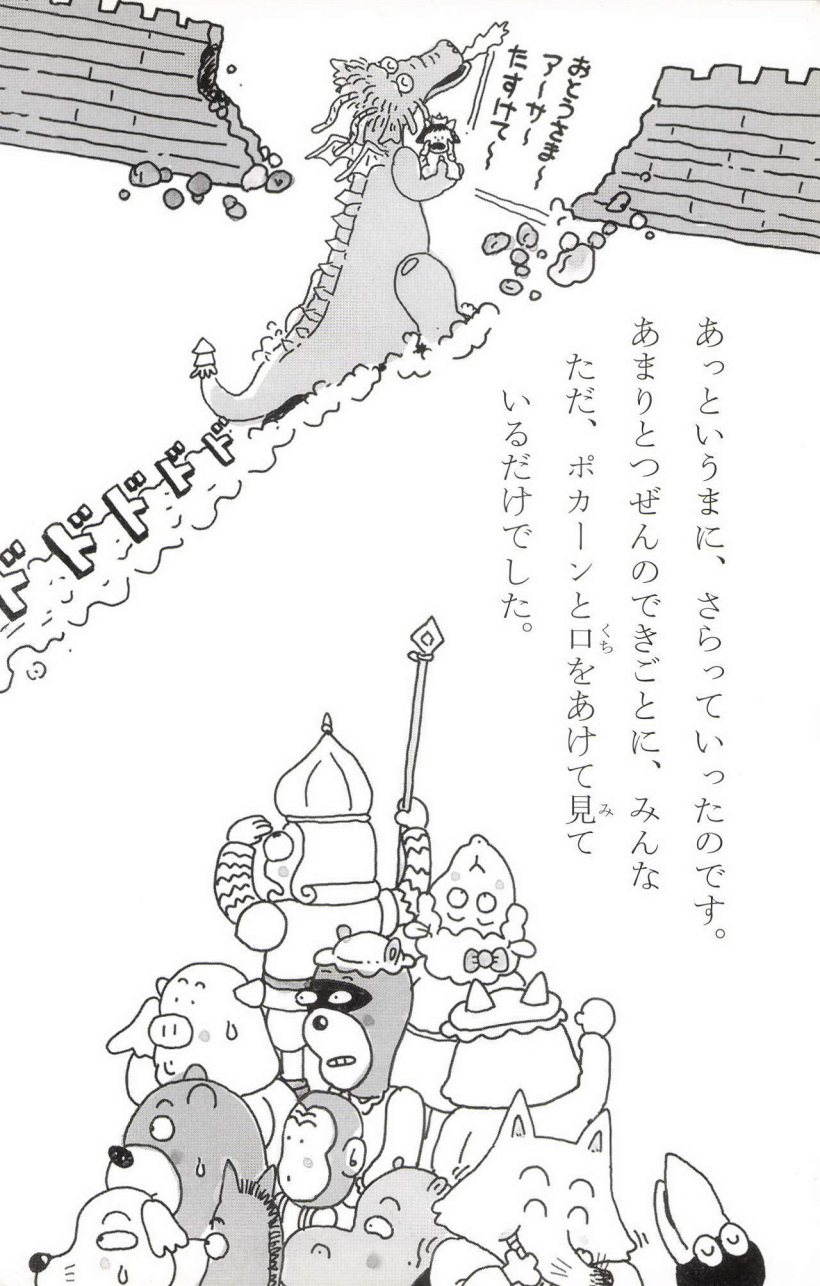
「グスッ。そうだ!!　わしはきめたぞ!!　あの、にっくきドラゴンをたいじして、むすめをつれかえった勇者を、わが国の王子としてむかえようぞ!!」

なみだ声で王さまがいいました。

「そのおことば、まっておりました。」



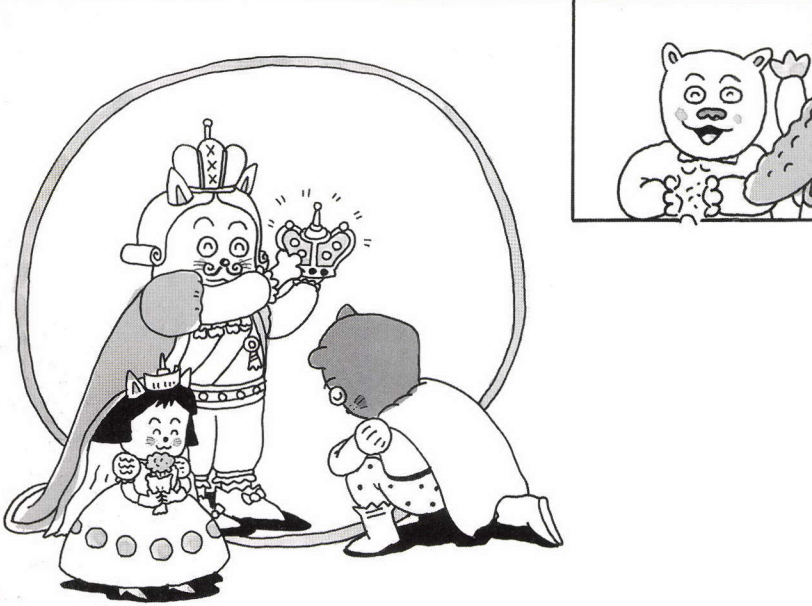
「ウアーン！」
王さまが、なきだしました。
わしのたいせつなかわいいむすめが、ドラゴンにつれさられてしまったあー。アーサー、なにをぼんやり見ておったのじゃ!!
ははあ
ドドドド



あっというまに、さらっていったのです。
あまりとつぜんのできごとに、みんな
ただ、ポカーンと口をあけて見て
いるだけでした。

キャー

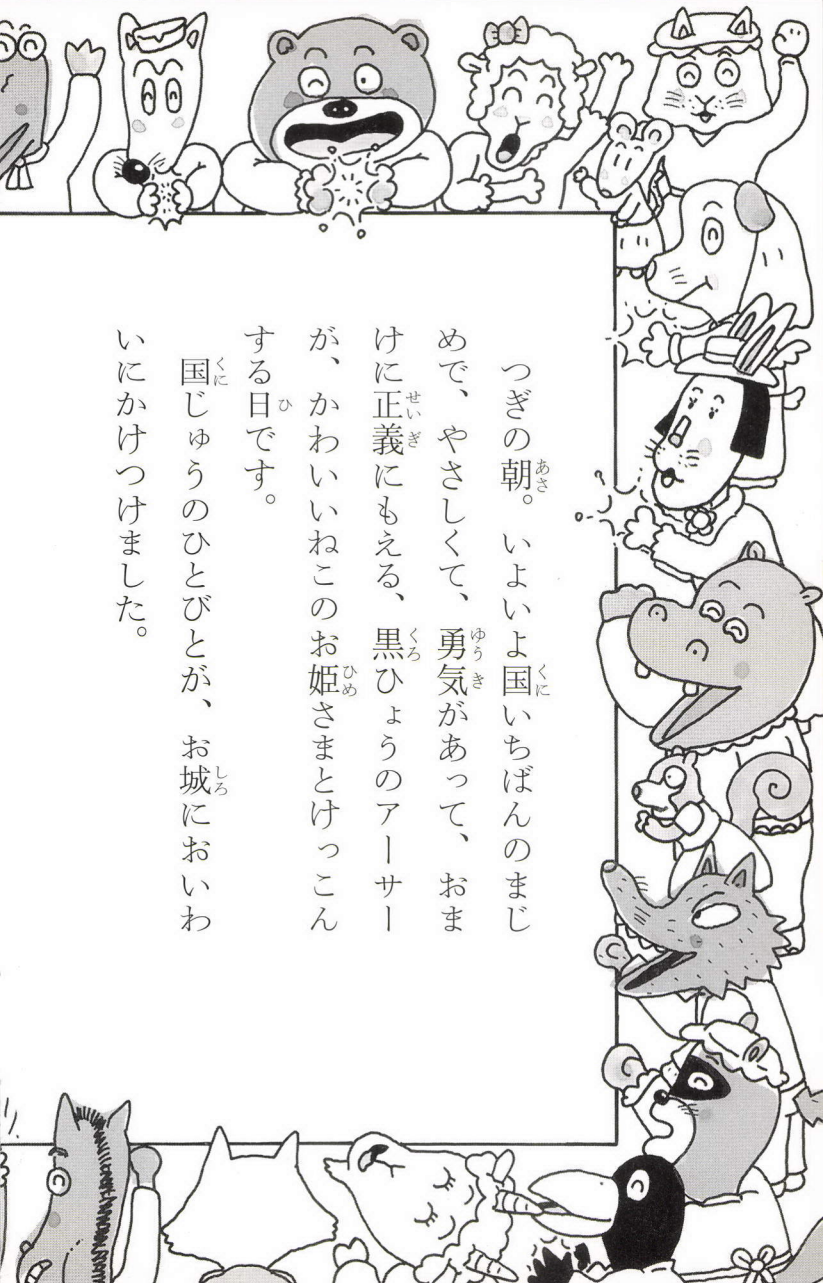
バリバリバリ――ン！
お城のかべをつきやぶって、大きなドラゴンが
あらわれました。ドラゴンは、口から炎をはき、
兵隊たちをけちらすと、かわいいお姫さまを
つまみあげ――



「あたらしい王子さま、おめでとう！」

「アーサー、バンザーイ！」

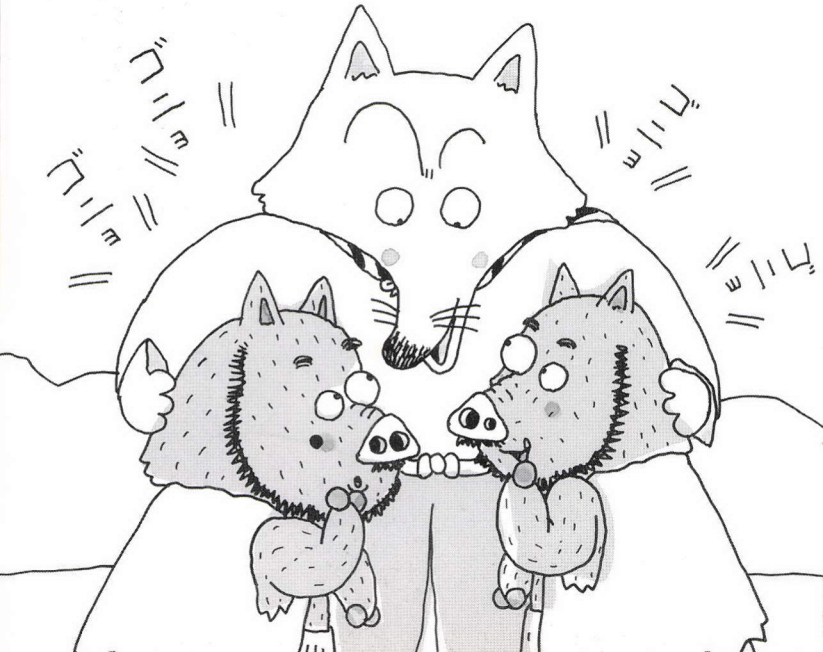
アーサーが、王さまから王子のしるしの王冠をいただこうとしたときです……。



つぎの朝。いよいよ国いちばんのまじめで、やさしくて、勇気があって、おまけに正義にもえる、黒ひょうのアーサーが、かわいいねこのお姫さまとけっこんする日です。

国じゅうのひとびとが、お城においわいにかけつけました。

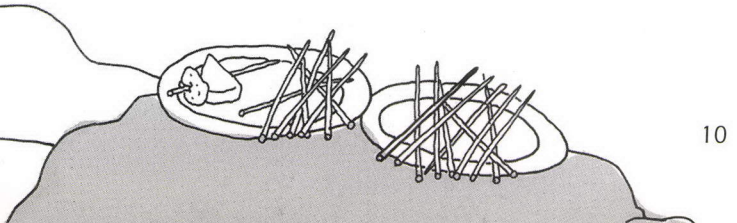
ゾロリは、さっそく
イシシ・ノシシと作戦
会議です。
どんなおそろしい作
戦をたてるのでしょ
う。

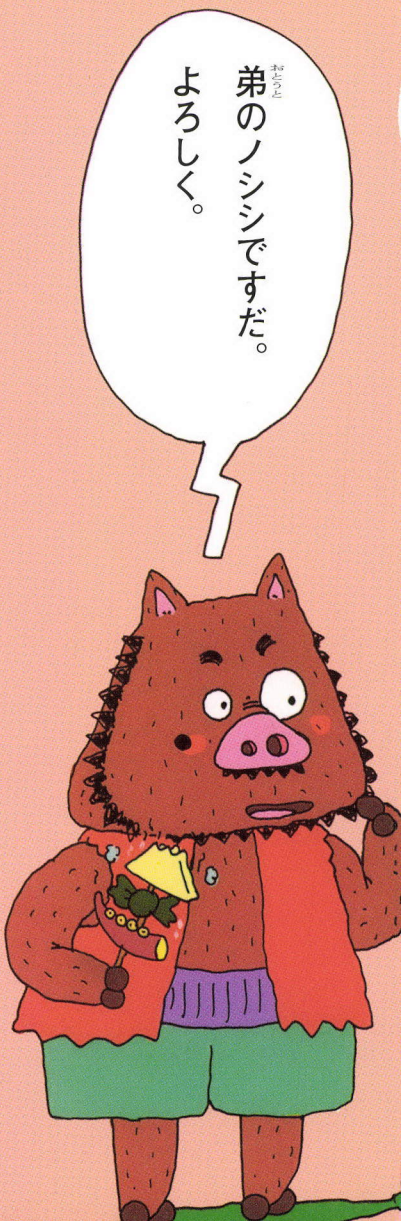


「うっへー、なんてひどい性格だ。それをきいては、いたずらの天才、悪のみかた、このゾロリさま、ほうってはおけないな。」

「でしょ。ここにゾロリ先生がきなすったのも、神さまのおみちびき。ぜひこの国の王子になって……。」

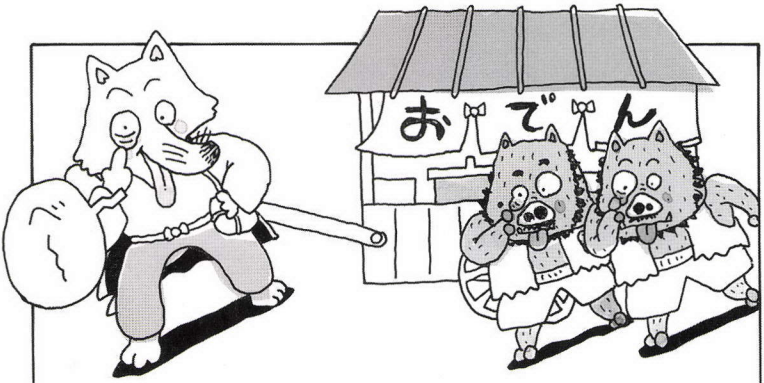
「そう、ここにゾロリ城パート2をつくろう。そして、おまえたちを大臣にして、おれさまは国民をこまらせて、しあわせにくらすのさ。きっとママもよろこんでくれるだろうなあ。」





「ゾロリ先生、ちょうどいいときにきなすった。
あした、この国のお姫さまが、ひどい男とけっこんするんだよ。」
「まじめでやさしくて、勇気があって、おまけに正義にもえる、
つよい黒ひょうなんですぜ。」
イシシとノシシがいいました。

「山賊のしょくん。おれさまにも、ちくわぶと
がんもどきをくれたまえね。」
「ああ、あなたがわるもののあこがれ、
ゾロリ先生でしたか。さあ、
どうぞどうぞ。」



「フッフッフッ。ざんねんながら、おれさまはいたずら、いじわるがだーいすきな、悪のみかた、かいけつゾロリさまだ。屋台ごと、おでんをおいて、きえうせるんだ。」

「えーっ、そ、そんな、ひどーい。」

おでん屋さんは、なきながらにげていきました。

おでん屋さんが山賊におそわれていたのです。
まてまてまて――い。
あっ、よかった。正義のみかただ。
おでん

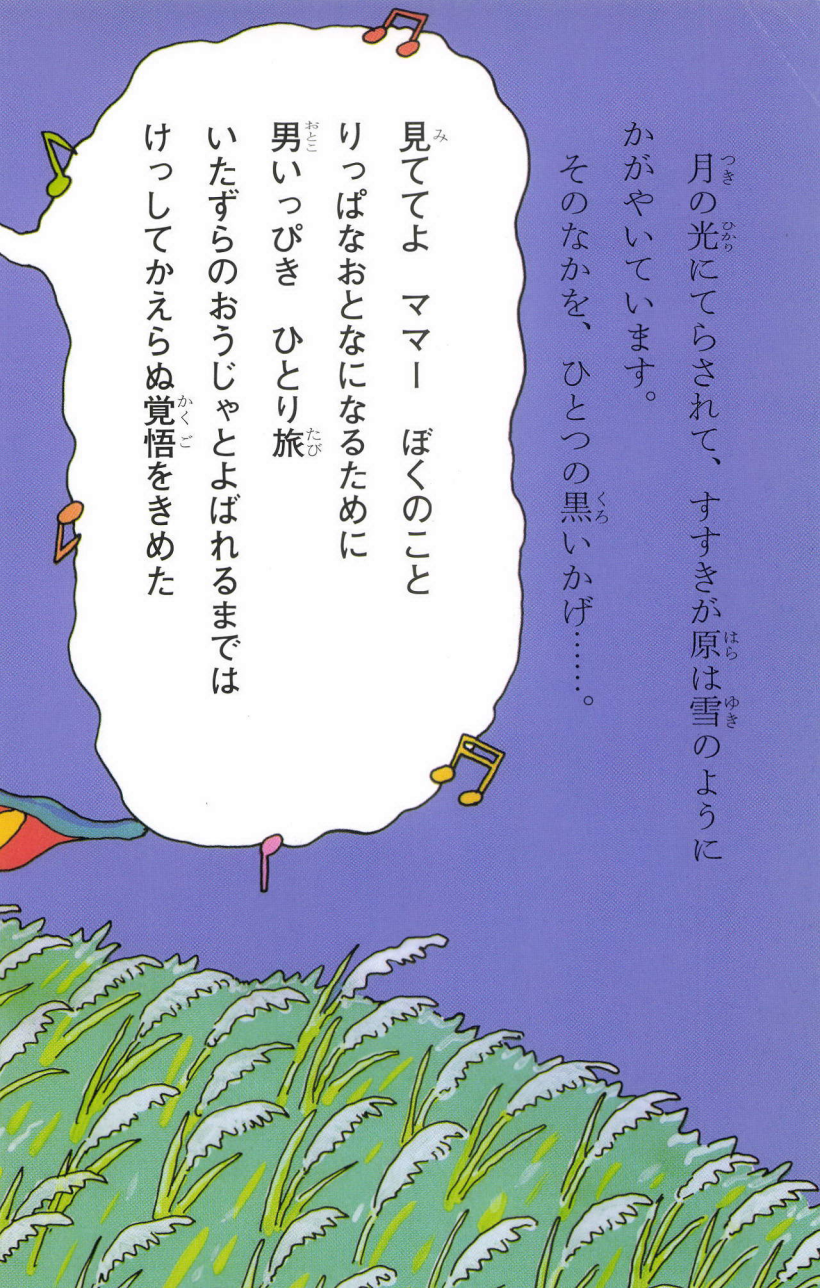
そうです。いたずらのしゅぎょうで旅にでた、あのゾロリです。

そのとき、やみをきりさいて、ひめいがきこえてきました。

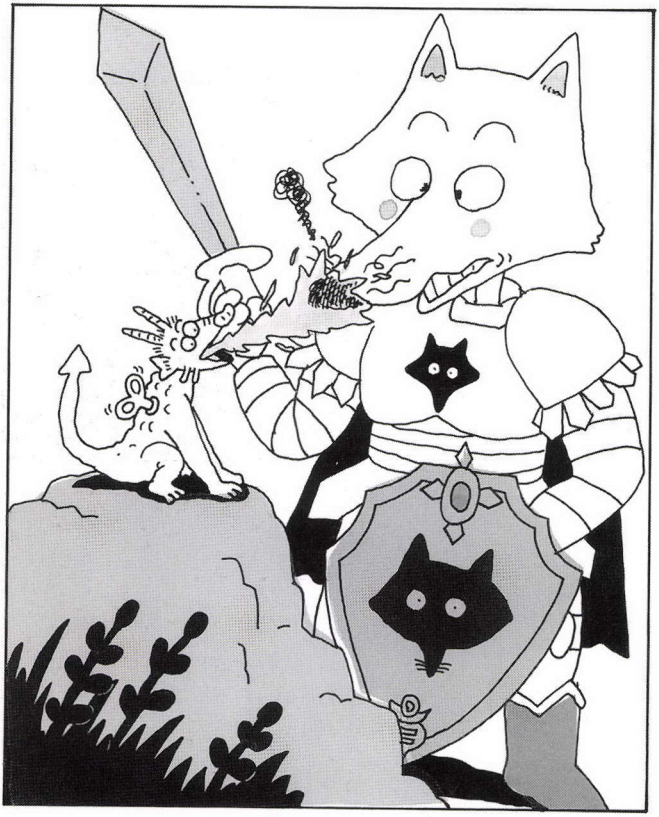
「たすけて〜〜〜〜。」

月の光にてらされて、すすきが原は雪のように
かがやいています。
そのなかを、ひとつの黒いかげ……。

見ててよ　ママー　ぼくのこと
りっぱなおとなになるために
男いっぴき　ひとり旅
いたずらのおうじゃとよばれるまでは
けっしてかえらぬ覚悟をきめた



かいけつゾロリのドラゴンたいじ



おまえもあまいものすきだろう？
おれさまもだ。

おまえ、夜、歯をみがくの、めんどうくさいだろう。
おれさまもさ。

あまいものたべすぎたり、歯をみがかないと、どうなるか知ってたか？
歯がいたくなるなんて、おれさま、知らなかったぞ、イタタタタ

ゾロリ 2 in 1

かいけつゾロリの ドラゴンたいじ きょうふのやかた

作・絵　原　ゆたか

ポプラ ポケット文庫

ゾロリ 2 in 1

かいけつゾロリのドラゴンたいじきょうふのやかた

作・絵　原 ゆたか

2 in 1